

平成 25 年 2 月 13 日

前期中等教育における説明的文章教材 の日中比較

教科教育専攻 国語教育専修

王 文姫

目次：

研究の動機	1
序章 研究の目的と方法	2
第1節 研究の目的	3
第2節 研究の方法	3
第1章 前期中等教育における説明的文章指導の目的	5
第1節 日本における説明的文章指導の目的	6
第1項 先行研究及び「学習指導要領」における説明的文章指導の目的	6
第2節 中国における説明的文章指導の目的	9
第1項 「語文課程標準」から見た説明的文章指導の目的	9
第2項 教科書教材から見た説明的文章指導の目的	11
第3節 説明的文章指導の目的における日中の比較	13
第2章 前期中等教育の国語教科書における説明的文章教材の内容と構成	15
第1節 日本の説明的文章教材の内容と構成	16
第2節 中国の説明的文章教材の内容と構成	19
第3節 説明的文章教材の内容と構成における日中の比較	23
第3章 前期中等教育における日中の説明的文章教材	25
第1節 「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝸蝓（緑のギリギリス）」 の比較	26
第1項 比較する教材について	26
第2項 「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝸蝓」の教材研究	26
1. 「アオスジアゲハとトカゲの卵」教材研究	26
2. 「绿色蝸蝓」教材研究	33
第3項 教材の比較研究	40
第2節 教師用指導書における教材の扱われ方の比較	41
第1項 教材の主題・要旨に関する記述	41
第2項 学習目標についての記述	42
第3項 指導計画についての記述	44
結章 研究の成果と今後の課題	51
第1節 研究の成果	52
第2節 今後の課題	53
引用文献・参考文献	54
資料	56
・ 教材「アオスジアゲハとトカゲの卵」	
・ 教材「绿色蝸蝓」	

研究の動機

日本と中国の前期中等教育における国語科授業は、一体どこが違うのか。

両国の教科書を見るとわかるように、日本の教科書の方が、載っている教材の数が少ない。そして、各教材にかかる指導の時間が長い。それに対して、中国の教科書には数多くの教材が載っていて、それぞれの教材にかかる指導の時間が日本より短い。

日本の中学校で行なわれている国語科の授業を参観することを通じて、ワークシートが多く使われている傾向があることに気づいた。中国の中学語文科の授業では、ワークシートではなく、各教室で設置されているコンピュータを使って PowerPoint で授業を行う場合が多いと聞く。また、日本の国語科の授業では、グループ学習等によって、生徒たちが相互に学びあうことが大切にされているようだ。それに対して、中国の語文科の授業では、生徒が一斉に黒板の方を向いて座るのが一般的であり、生徒がグループで学びあう姿はほとんど見られない。

こうした両国の前期中等教育における授業の違いから、私が気になったのは、説明的文章というジャンル及びその指導のことである。

私たちは日常生活の中で、多くの説明的文章と接している。例えば、新聞記事もそうだし、解説書なども説明的文章の一種だといえるだろう。また、道に迷ったとき、人に道を尋ねたとする。その答え、つまり目的地への行き方の説明も、書かれたものではないが、説明的文章の一つであるといえるだろう。このように、さまざまな説明的文章に接することを通じて、私たちは大量の情報を収得できるし、新しい知識や考え方も得られる。それは説明的文章を読むことの重要な役割だと考えられる。

日本でも中国でも、母語の教育においては説明的文章を読む力はもちろん、読むことを通じて論理的な思考力、認識力を育てなければならない。また、説明的文章の表現について考えることによって、生徒の表現力を高めることも大切である。

ところが、日本の国語科教育でも、中国の語文科教育でも、説明的文章指導は、今まで大きく見落とされてきた領域である。文学作品を中心として指導を行う状態が長く続き、これまでの説明的文章指導は、形式的なことばかりを扱ってきた。授業がつまらないから生徒たちの学習意欲が低いし、授業の効果も望ましいものとならない。上に述べたように、説明的文章を読むことは私たちの生活と大きく関わっていて、新しい知識を得られるなどの重要な役割がある。どのように説明的文章指導を行うべきなのか、考え直す必要があると思う。

本論文では、前期中等教育に焦点を絞って、日本の国語科教育と中国の語文科教育における説明的文章指導に関する比較研究を行い、両国の共通点や相違点を明らかにしたい。このことは、両国における母語の教育をよりよい方向に導くことにつながると考えられる。以上のような思いから、本論文の執筆に臨むこととした。

序章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

説明的文章指導に関する先行研究を考察するとわかるように、日本における説明的文章指導については、豊富な成果があげられている。しかし、その成果には中国における説明的文章指導との比較研究が示されていない。

その一方で、中国における説明的文章指導については、さまざまな課題があるにもかかわらず、指導に関する研究がほとんど進んでいない。また、日本における説明的文章指導との比較研究も行なわれていない。

こうした先行研究の状況をふまえて、本論文では、日中の母語教育における説明的文章指導の共通点と相違点を明らかにすることを研究の目的として設定する。前期中等教育（日本の中学校、中国の初級中学）での説明的文章の学習は、初等教育（日本の小学校、中国の小学）での学びを受けて行われる。また、後期中等教育（日本の高等学校、中国の高級中学等）での学びに結びついていくものでもある。このように考えると、前期中等教育は、その重要性が認められる。そこで本論文では、特に前期中等教育に焦点を絞って考察を進めることとする。

なお、本論文では、中国の前期中等教育、つまり「初級中学」を「中学」と省略して表す。論文中における中国の「中学」とは「初級中学」のことであり、後期中等教育（高級中学等）は含まない。

第2節 研究の方法

本論文では、上に記した目的を達成するために、次のような方法によって研究を進める。

・日本と中国における説明的文章指導に関する資料を取り上げて、それを比較する。

日本の「学習指導要領」と中国の「全日制義務教育語文課程標準」を取り上げて、それぞれの説明的文章指導の目的を明らかにして比較する。日本については、先行研究の指摘と「学習指導要領」の記述を合わせて考察を行う。それに対して、中国については、人民教育出版社の教科書に載っている教材の指導事項と「語文課程標準」とを関連させて、同国における説明的文章指導の目的を明らかにする。

・日本と中国における説明的文章教材を比較する

日本の教育出版の教科書と中国の人民教育出版社の教科書を取り上げて、各教科書の内容や構成について考察する。そして、教科書に載っている説明的文章教材を比較することによって、その共通点と相違点を明らかにする。具体的には、教育出版の教科書に載っている説明的文章教材の「アオスジアゲハとトカゲの卵」と人民教育出版社の教科書に載っている説明的文章教材の「绿色蝸蝓（緑のキリギリス）」を取り上げて比較する。教材の内容や指導のあり方などに対する考察を通じて、両国の説明的文章教材におけるそれぞれの特徴を明らかにしたい。

以上の方法に基づいて、本論文では「前期中等教育における説明的文章指導の目的」(第1章)、「前期中等教育の国語科教科書における説明的文章教材の内容と構成」(第2章)、「前期中等教育における日中の説明的文章教材」(第3章)の各章を設けて、考察を進める。

第1章 前期中等教育における説明的文章指導の目的

我々の日常生活において、説明的文章は数多く存在する。政治の言論や文化に関する発言はもちろん、自らが選択した職業や生き方にも関わって、我々は多様な説明的文章に日々接している。国語科教育では説明的文章が教材として扱われているが、そこで「読む力」と「書く力」を身につけられるかどうかということが、生徒の将来の在り方を大きく左右していくと思われる。どのように説明的文章を扱うかということは、現在の国語科教育の大きな課題である。そこで本論文では、日本と中国の国語科教育における説明的文章指導を対象に、比較研究を行うこととする。

第1節 日本における説明的文章指導の目的

第1項 先行研究及び「学習指導要領」における説明的文章指導の目的

第一章では、日本と中国の前期中等教育における説明的文章指導の目的について考察する。そのために、まず、説明的文章の定義を確かめておく。

日本の国語科教育において、「説明的文章」あるいは「説明文」の概念をどう扱うべきかについてはさまざまな解説がある。櫻本（2001）では、「説明文」について次のように述べられている。

ある物事を取り上げ、その成り立ちや仕組み、働き、価値などを解き明かし、それを知らない人がよくわかるように伝える文章のことである。文学的文章に対する説明的文章として広く捉える場合と、「意見文」「観察記録文」「論文」などと区別して狭義に捉える場合とがある。

（櫻本明美（2001）「説明文」, 日本国語教育学会編『国語教育辞典』, 朝倉書店, p. 249. ）

本論文では、「説明的文章」を広く捉えて、「説明文」「論説文」「評論文」といった下位のジャンルを含むものとして扱う。また、随筆は説明的文章とは異なるジャンルであるが、日本の国語科の教科書、特に高校の教科書を見た場合、ジャンルとして「評論・随筆」と記されているものがあり、説明的文章の一ジャンルである評論文と随筆との区分が明確ではない場合がある。このことから、随筆のような文章であっても、説明表現によって物事について解説している文章については、これを説明的文章として扱いたい。

さて、日本における説明的文章指導について、先行研究では、以下のように指摘されている。

これまでの説明的文章の授業では、文章表現の意味を受容したり整理したりする力だけではなく、論理的な表現力、思考力、認識力、さらには情報の処理や生産にかかわる力の育成が求められてきた。

（守田庸一（2011）「説明的文章の学習指導の方法」, 全国大学国語教育学会編『中学校・高等学校国語科教育研究』, 学芸図書, p. 99. なお、この論述は、植山俊宏（2001）「説

明的文章の指導」(日本国語教育学会編『国語教育事典』朝倉書店、p. 247) や、植山俊宏(2002)「説明的文章の領域における実践研究の成果と展望」(全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』、明治図書、p. 282) といった先行研究に基づいている。)

上記の指摘を見るとわかるように、日本における説明的文章指導では教材を理解することだけでなく、論理的な表現力や思考力などを育てることが重視されている。

ここからは、特に中学校に焦点を絞って論を進める。小学校での学びを受けて行われる中学校での説明的文章の学習は、高校での学びに結びついていくという点でも、その重要性が認められる。

まず、現行の「中学校学習指導要領」(平成 20 年 3 月告示, 以下「学習指導要領」) の記述から、中学校の国語科教育における説明的文章指導の目的について考察する。現行の学習指導要領では、国語科の目標について、以下のように述べられている。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

この目標に即して考えるならば、中学校における国語科の授業では、日本語を「適切に表現し正確に理解する能力」だけでなく、「思考力」を育てることも重要である。説明的文章指導においても、単に読解力を育成するだけでなく、表現力や思考力を育むことも忘れてはならない。

本論文では、説明的文章の指導に焦点を絞るため、以下、「読むこと」の指導を中心に考察を進める。

まず、各学年における「C 読むこと」の目標を示す。

第一学年

目的や意図に応じ、様々な本や文章などを読み、内容や要旨を的確にとらえる能力を身に付けさせるとともに、読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる。

第二学年

目的や意図に応じ、文章の内容や表現の仕方に注意して読む能力、広い範囲から情報を集め効果的に活用する能力を身に付けさせるとともに、読書を生活に役立てようとする態度を育てる。

第三学年

目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して自己を向上させようとする態度を育てる。

『中学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省（2008），東洋館出版社，以下『学習指導要領解説』）では、「読むこと」の指導事項の構成について、次のように述べられている。

- ・ 語句の意味の理解に関する指導事項
- ・ 文章の解釈に関する指導事項
- ・ 自分の考えの形成に関する指導事項
- ・ 読書と情報活用に関する指導事項

（『学習指導要領解説』（p. 18。））

その中でも、「文章の解釈に関する指導事項」で指摘されている、各学年における説明的文章指導と関連する記述を抜き出すと、次のようになる。

第一学年

- イ 事実と意見などを読み分け、要約したり要旨をとらえたりすること。

第二学年

- イ 文章全体と部分との関係、例示の効果について考えること。

第三学年

- イ 文章の論理の展開の仕方をとらえること。

（『学習指導要領解説』（p. 20。））

以下、『学習指導要領解説』で載っている各学年における「C 読むこと」の目標と、上の引用に示されている指導事項をふまえて、説明的文章指導の目的を考察する。

第一学年では、客観的な事実と筆者の意見とを読み分け、要約したり要旨をとらえたりすること、第二学年では、文章全体と各段落などの部分との関係や、例示の効果を考えること、第三学年では、文章の論理の展開の仕方をとらえることが求められている。これらだけであるならば、文章に述べられている内容と述べ方を確認することが、説明的文章の学習ということになってしまう。その一方で、学習指導要領では、「例示の効果を考える」のように、表現の仕方に目を向けたりその効果を吟味したりする学習も促されている。現在の日本の学習指導要領では、第3学年の目標に掲げられているように、「文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力」も要求されている。つまり、書かれていること

を確認するだけでなく、文章の内容や述べ方を評価するような読みも求められているのである。学習指導要領によるならば、こうした読みを実践する能力を高めたり、思考力や表現力を育んだりする説明的文章指導が、国語科の目標を達成するためには必要なのである。

第2節 中国における説明的文章指導の目的

第1項 「語文課程標準」から見た説明的文章指導の目的

中国における説明的文章指導について考察するのに先立ち、まず中国の語文科教育における説明的文章の定義を明確にしておく。

说明事物的情况或道理的文章。

《日本語訳》

物事の様子や状態またはわけや理由を説明する文章。

(中国社会科学院語言研究所編 (2005)『現代漢語詞典』, 商務印書館, p. 1286.)

中国の語文科教育の研究では、日本の国語科教育の研究のように、「説明的文章」と「説明文」を分けて定義していない。すなわち、中国の中学の語文科教育では、説明的文章の指導とは説明文の指導のことを指す。

中国における説明的文章指導の内容を考察するために、ここでは、日本の「学習指導要領」と対応する中国の「全日制義務教育語文課程標準」を取り上げて分析する。日本における説明的文章指導を考察する際と同じように、語文科の目標における「読むこと」に関する記述を以下でまとめる。

具有独立阅读的能力，注重体验情感，有较丰富的积累，形成良好的语感。学会运用多种阅读方法。

《日本語訳》

独自分で読む能力を備えること。感情の体験を重視して、よい語感と豊富な積みがあること。さまざまな読み方を身につけること。

「語文課程標準」では、前期中等教育（7～9年）における「読むこと」に関する指導について以下のように述べられている。

第四学段（7～9年）

（二）阅读

1. 能用普通话正确、流利、有感情地朗读。
2. 养成默读习惯，有一定的速度，阅读一般的现代文，每分钟不少于 500 字。能较熟练地运用略读和浏览的方法，扩大阅读范围。

3. 在通读课文的基础上，理清思路，理解、分析主要内容，体味和推敲重要词句在语言环境中的意义和作用。
4. 对课文的内容和表达有自己的心得，能提出自己的看法，并能运用合作的方式，共同探讨、分析、解决疑难问题。
5. 在阅读中了解叙述、描写、说明、议论、抒情等表达方式。
8. 阅读简单的议论文，区分观点与材料（道理、事实、数据、图表等），发现观点与材料之间的联系，并通过自己的思考，作出判断。阅读新闻和说明性文章，能把握文章的基本观点，获取主要信息。阅读科技作品，还应注意领会作品中所体现的科学精神和科学思想方法。
10. 了解常用的修辞方法，体会它们在课文中的表达效果。
11. 能利用图书馆、网络搜集自己需要的信息和资料，帮助阅读。
12. 学会制定自己的阅读计划，广泛阅读各种类型的读物，课外阅读总量不少于 260 万字，每学年阅读两三部名著。

《日本語訳》

第四段階（7～9年）

（二）読むこと

1. 正確、流暢な標準語で感情を込めて朗読できる。
2. 黙読の習慣を養って、一定のスピードで一般的な現代文を読む。一分間で少なくとも 500 字。ざっと目を通したり大まかに見たりして読む範囲を広げる。
3. 教材を読み取った上で、筆者の構想と教材の内容を分析し、重要な語句が持つ言語的な環境での意味と役割を、吟味して考える。
4. 教材の内容に対して自分なりの得たことを表現し、自分の考えを表現できる。そして、グループで問題を討論、分析し解決することができる。
5. 読むことを通じて叙述、描写、説明、論説などの表現の仕方を学ぶ。
8. 簡単な論説文を読み、観点と論拠（理論、事実、データ、図表など）を区別でき、観点と論拠の間の関連性を分析して自分で判断を下す。ニュースと説明文を読み、文章の基本的な観点を把握して情報を読み取る。科学と技術に関する文章を読み、科学的精神と科学的な考え方を読み取る。
10. よく使われる修辞方法に触れて、教材での効果を吟味する。
11. 読むため、図書館やインターネットなどを利用して必要な情報と資料を見つける。
12. 自分なりのプランを計画して、各種類の読み物を読む。総量は少なくとも 260 万字。毎年二、三部名著を読む。

以上の指摘の中で、説明的文章指導に関わる項目は8である。この項目では、説明文を読む時、筆者の観点を明確にすることと情報を正しく読み取ることが求められている。確かに、論説文を読む時、筆者の観点とその観点を支える論拠の関連性に対する分析力は必

要である。この点は、前に述べた語文科の目標における「読むこと」に関する記述、「読む能力を備えること」「さまざまな読み方を身につけること」にあてはまると考えられる。また、「語文課程標準」では第三学段、すなわち小学校5～6年における「読むこと」の指導内容について、「阅读说明性文章，能抓住要点，了解文章的基本说明方法。」（説明的文章を読み、要点をとらえて文章の基本的な説明の仕方を学ぶ。）と指摘されている。中学校の説明的文章の学習指導は、小学校の学習指導を受け継ぎ、「要点をとらえて文章の基本的な説明の仕方を学ぶ」というところから、「観点と論拠（理論、事実、データ、図表など）を区別でき、観点と論拠の間の関連性を分析して自分で判断を下す」というところに至るまで、生徒の読みを育てることが求められているのである。

なお、本論文の第二章では、日中両国における説明的文章教材の内容と構成について具体的に分析する。その中でも言及するが、中国の説明的文章教材においては、科学や技術などの題材に関するものが多い。「語文課程標準」でも、「科学的な精神と科学的な考え方を読み取る」とあるように、この類の文章に関する指導が強調されている。これは中国における説明的文章指導の大きなねらいであるともいえるだろう。

第2項 教科書教材から見た説明的文章指導の目的

第1項では、「語文課程標準」の記述から中国の中学における説明的文章指導の目的を考察した。第2項では、教科書に載っている指導事項から、説明的文章指導の目的を検討する。

ここでは、中国で最も多く使われている中国人民教育出版社発行の語文科教科書に掲載されている、日本の説明的文章教材と同じ働きを持つ教材を取り上げる。これらの説明的文章教材は、説明文、論説文などのジャンルに分けられている。教科書では、単元ごとに教材のジャンルが設定されており、各単元においては指導事項も明示されている。

以下に示すのは、それぞれ単元（ジャンル）の指導事項である。単元名の後の括弧内は、その単元で取り上げられる説明的文章のジャンルを示す。なお、中国の語文科教科書に載っている随筆には説明表現が多く見られることから、随筆を扱う単元の指導事項も取り上げることとする。

七年上 第四单元（随筆）

- ① 理解课文的基础上，练习概括课文的内容要点。感受科学的魅力。
- ② 练习快速默读课文，记住主要内容。

《日本語訳》

- ① 章を理解した上で、文章の内容をまとめさせること。科学の魅力を感じさせること。
- ② 文章を黙読して、文章の内容を覚えさせること。

七年下 第六单元（随筆）

①在理解课文的基础上，调动已有的知识储备，结合自己的生活体验，发表自己的见解，做到观点明确，言之有理。

②读文章，体会关爱动物、善待生命的情感，并对人与动物的关系进行深入思考。

《日本語訳》

①文章を理解した上で、既有的知識を運用して自分の生活の体験を結合しながら、自分の観点を明確にして発表させること。

②文章を読むことを通じて、動物を愛する、生命を大切にする感情を感じさせること。また、人類と動物の関係を深く考えさせること。

八年上 第三单元（説明文）

① 通过阅读本单元课文，接触多种知识，开阔眼界，激发对祖国文化的自豪感。

② 学习如何抓住特征来介绍事物，要理清说明顺序，了解常用的说明方法。

③ 体会说明文准确，周密的语言。

《日本語訳》

① この単元の文章を読むことに通じて、さまざまな知識に接し、視野を広げて我が国の文化に対する誇りを持たせること。

② 特徴をとらえて物事を紹介する。説明の順序を整理して、日常でよく用いる説明の方法を学ばせこと。

③ 説明的文章の厳密な言葉づかいを学ばせること。

八年上 第四单元（説明文）

①培养注重观察，讲究实证的科学精神和态度。

②注意说明顺序和方法。

③按照一定的速度进行默读，能按照要求筛选信息。

《日本語訳》

① 観察能力を育むこと。科学的な精神と態度を重視させること。

② 説明の順序と方法を身に付けさせること。

③ 一定のスピードで黙読をして、与えられた条件で情報を探させること。

九年上 第四单元（論説文）

在理解课文内容、熟悉科学文艺作品特点的同时，树立环保意识。

《日本語訳》

文章の内容を理解した上で、科学的な文学作品の特徴を学びながら、エコ意識をはっきりさせること。

日本の説明的文章指導と同じように、中国の説明的文章指導でも、述べられている内容

を理解させることだけでなく、読むことを通じて思考力、認識力を育てることが重要である。また、述べ方に着目して教材を読ませ、生徒の表現力を高めることも大切である。中国の中学語文教科書では、指導事項が説明文・論説文・随筆といったジャンルと対応している。それぞれの指導事項を見ると、「説明の順序を整理して、日常でよく用いる説明の方法を学ばせること」「説明的文章の厳密な言葉づかいを学ばせること」（八年上 第三単元（説明文））、「説明の順序と方法を身に付けさせること」（八年上 第四単元（説明文））のように、説明文のジャンルでは教材の述べ方を意識した指導事項、つまり生徒の表現力を高めることに結びつく指導事項が設定されている。しかしその一方で、論説文や随筆のジャンルではそうした指導事項がない。また、文章理解は指導事項に挙げられているものの、「文章を理解した上で、文章の内容をまとめさせること」「文章を黙読して、文章の内容を覚えさせること」（七年上 第四単元（随筆））のように、書かれている内容の確認にとどまっている。あるいは、「文章を読むことを通じて、動物を愛する、生命を大切にする感情を感じさせること。また、人類と動物の関係を深く考えさせること」（七年下 第六単元（随筆））、「エコ意識をはっきりさせること」（九年上 第四単元（論説文））のように、思考力や認識力を育てるというよりも、道徳的な価値を付与することの方が強く意識されている。第2章で詳しく紹介するが、中国の教科書には多様な説明的文章教材が載っている。せっかくいろいろな教材が扱われているのに、指導事項が限定的であるという点に、中国の中学語文科の課題があるといえるだろう。

第3節 説明的文章指導の目的における日中の比較

第1節と第2節では、日本と中国における説明的文章指導の目的について、それぞれ考察した。その考察をふまえて、説明的文章指導の目的における日中の共通点と相違点を明らかにしたい。

国語科教育では、どのような力を育てようとしているのかを明確にすることが大切である。第1節と第2節での考察から、各国では述べられている内容を正確に把握するという読解力の育成が重要な位置にあることがわかる。日本における説明的文章指導では、「事実と意見などを読み分け、要約したり要旨をとらえたりすること」「文章全体と部分との関係、例示の効果について考えること」「文章の論理の展開の仕方をとらえること」などが扱われている。一方、中国における説明的文章指導では、「観点と論拠の間の関連性を分析して自分で判断を下すこと」「文章の基本的な観点を把握して情報を読み取ること」「科学的な精神と科学的な考え方を読み取ること」などが扱われているのである。ここに、両国の共通点がある。加えて、両国とも教材の述べ方に着目した指導内容が織り込まれており、教材の内容に対する理解も学年が上がることに従って高まっている。ここにも、両国における説明的文章指導の共通点が見出せるだろう。

第1節で述べたように、日本の説明的文章指導においては「文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力」を育むことが求められている。中国の説明的文章指導におい

ては、そのような能力の育成は目指されておらず、道徳的な価値を付与することが強く意識されている。ここに、日中の説明的文章指導の相違点を見出すことができるだろう。

第2章 前期中等教育の国語科教科書における 説明的文章教材の内容と構成

第2章では、日本の教育出版が発行している中学校の国語科教科書と、中国の人民教育出版社が発行している中学の語文科教科書を取り上げる。両者の教科書について、前期中等教育において扱われている説明的文章教材の内容と構成を分析して、比較研究を行う。

第1節 日本の説明的文章教材の内容と構成

上にも述べたとおり、本論文では、日本の教育出版の教科書を取り上げ、国語科教育における説明的文章教材の内容と構成について考察を進める。日本では教育出版、光村図書、東京書籍、学校図書、三省堂の5社が中学校の国語科教科書を発行している。本論文で取り上げるのは、これらのうち、教育出版の教科書である。この教科書を選定した理由は、二つある。一つは、今日の現代社会に応じた内容の新教材が多いと思われたことである。こういった教材は現在の日常生活と関連が深く、指導する際に生徒の関心を引き起こしやすいと考えられることから、質の高い教科書であると判断した。もう一つは、後に詳しく分析、考察する「アオスジアゲハとトカゲの卵」が掲載されていることである。この教材を個別に見る前に、それが収められている教科書全体を視野に入れて検討しておきたい。

まず、教育出版の教科書に載っている説明的文章教材を以下にまとめる。

一年生

「花の形に秘められたふしぎ」
「笑顔という魔法」
「自分の頭で考える？」
「言葉がつなぐ世界遺産」
「言葉の上達は競技を上達させる」
「新しい世界をつくる言葉」

二年生

「アオスジアゲハとトカゲの卵」
「悠久の自然」
「ガイアの知性」
「学ぶ力」
「感覚を言語化する」
「言葉の達人になろう」

三年生

「『新しい博物学』の時代」
「無言館の青春」
「歴史は失われた過去か」

「文化としての科学技術」

「言葉の力」

「言葉は私の聴診器」

「語り継ぐもの」

「無名の人」

上記のリストから、この教科書に載っている説明的文章教材が、以下のような、さまざまな分野に関わっていることが読み取れる。

- ・ 自然や動植物の生態
- ・ 言葉の使用や変遷
- ・ 人と人のつながり
- ・ 人々が物事に接する態度と方法
- ・ 文化と歴史

これを見ると、人間の身の回りの物事に関する豊富な題材が扱われているといえるだろう。これらの題材は私たちの日常生活との関連が深いことから生徒の興味を引き起こし、受け入れられやすい内容であると考えられる。このことから、国語科の授業では、上のような題材を扱っている説明的文章教材を指導することで、生徒の学習意欲が高められるといえるだろう。

先行研究では、説明的文章教材の内容について次のように指摘されている。

内容的に、実用文的なものは少なくなり、科学的（人文科学・自然科学とも）なものが多くなる傾向がある。その中でも、従来読者の興味を引きやすいとして多く採択された奇抜な内容をもつものや珍しい事物・事象を紹介したものなどの新奇な題材を扱ったものなどは数が少なくなっており、卑近もしくは日常的な題材を取り上げながら、その機能・構造、過程・因果関係、意義・価値などを知的関心をよびおこすように説明したり、解明したりするものが多くなっている。

（植山俊宏（1990）「説明的文章の指導」，大槻和夫編『教職科学講座 17 国語教育学』，福村出版，p. 104。）

この文章は、現行の、つまり 2011 年に検定を受けた教科書が発行される前に書かれたものである。しかし、ここで述べられている指摘は、上にまとめた教育出版の教科書に載っている説明的文章教材を見る限り、今の教科書教材の内容についても当てはまると考えられる。

続いて、上に述べた教材の内容と国語科の目標との関連にも着目する。国語科の目標で

は、「伝え合う力を高める」ことが要求されている。『学習指導要領解説』では、「伝え合う力を高める」という目標について、次のように解説されている。

「伝え合う力を高める」とは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり理解したりする力を高めることである。

このような言語能力は、社会生活に生きて働くよう、一人一人の生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力として育成することが大切である。

(『学習指導要領解説』(p. 9。))

『学習指導要領解説』に述べられているとおり、社会生活では「互いの立場や考えを尊重」することや「相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする」ことが求められる。リストにまとめた教育出版の教科書に載っている「笑顔という魔法」や「言葉の達人になろう」などの説明的文章教材は、人と人とのつながりや人々が物事に接する態度と方法など、社会生活に不可欠な知識を扱っている。生徒がこうした教材で学ぶことによって、国語科が求めている「伝え合う力を高める」という目標がよりよく達成できると考えられる。

次は、説明的文章教材の構成について考察していきたい。その前に、まず教育出版が発行している教科書の構成を確認する。

以下のリストで示すように、この教科書は五つの部分で構成されている。

- ・ 読むこと
- ・ 話すこと・聞くこと
- ・ 書くこと
- ・ 伝統文化と言語
- ・ 補充教材集

『学習指導要領解説』では、各学年の目標と内容について、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という四つの部分に分けて解説している。上記のリストから、教育出版の教科書は『学習指導要領解説』に載っている各学年の目標と内容についての解説の分け方に従っていることがわかる。そして、この教科書では、説明的文章教材は、文学教材と混じる形で「読むこと」の部分に位置づけられている。

『学習指導要領解説』に載っている各学年における「C 読むこと」についての解説の中から、説明的文章教材と関連する言語活動例を抜き出してみる。

第1学年

イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。

第2学年

イ 説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。

第3学年

イ 論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと。

(『学習指導要領解説』(p. 21。)

上記の言語活動例をふまえて、教育出版社の教科書に載っている説明的文章教材の構成を考察する。

一年生では、「花の形に秘められたふしぎ」や「言葉がつなぐ世界遺産」のような、植物の生態や言葉の使用などに関する説明文が多く見られる。これらの説明文では、図表が多く使われている。教材を学ぶ際、文章と図表の関連を考える力が必要であると思われる。二年生では、「悠久の自然」や「学ぶ力」のような、自然や、人々が物事に接する態度と方法などに関する説明文と論説文が取り上げられている。学ぶ際には、教材の内容を理解した上で自分なりの考えをもつことが求められる。そして、三年生では、「歴史は失われた過去か」のような論説文が多く取り上げられている。この段階では、自分の視点から情報を読み取り、読み比べる力が要求される。

以上のように考えると、一年生から始まり、学年があがるに従って、文章を理解することだけではなく、文章を理解した上で自分の考えをもつといった、より高い読解力や表現力が求められることがわかる。さらに、三年生になると、自分なりの考えを持ち読み比べるといったことが求められ、より高い表現力やそれを支える論理的な思考力が必要であると考えられる。つまり、情報を得る—情報を処理する—フィードバックという認知力発達のプロセスに合っているように、教材が構成されていると考えられる。

第2節 中国の説明的文章教材の内容と構成

中国の前期中等教育の語文科教科書において説明的文章教材は、第一章で述べたとおり、説明文教材と同じ概念で扱われている。本論文では、中国の説明的文章教材の内容と構成を考察するために、日本の説明的文章教材と同じ働きを持つ中国の説明的文章教材を取り上げて分析をする。

以下、中国で最も多く使われている中国人民教育出版社の教科書に載っている説明的文章教材の内容を、簡潔にまとめる。

七年上 第四单元

・「看云识天气」(「雲を見て天気を知る」)

雲の形と色という二つの方面から雲と天気に関連性を説明している。雲の形と色によって天気を予測する目的と方法を学ばせる。文脈をとらえて文章の内容を全体的に理解させようとしている。また、大自然に対する熱愛の感情を育てようとしている。

・「绿色蝾螈」(「緑のキリギリス」)

エッセイのような形式で、キリギリスの特徴と生活習慣を説明している。筆者が持つ生命に対する尊敬の感情を感じさせ、生物学の神秘を探索する興味を喚起しようとしている。全篇の描写の中から説明の方法を学ばせることも意図されている。

・「山市」(「蜃気楼」)(古文)

蜃気楼現象の発生から消失までの様子を描写している。想像力と視野を広げさせる教材である。

七年下 第六单元

・「马」(「馬」)

違う生存環境では、同じ馬でも異なった姿形になることを説明している。馴化されて人類に利用されている馬に対する同情を感じさせようとしている。また、人類と動物の関係を深く考えさせようとしている。

八年上 第三单元

・「中国石拱桥」(「中国の石拱橋」)

趙州橋と盧溝橋を例として、中国の石拱橋の特徴を説明している。設計と施工における独特の創造及びその芸術的価値を説明することに通じて、中国の民衆の知恵を褒めている。物事の特徴を捕まえて順序よく説明することを学ばせようとしている。説明的文章の厳密な言葉づかいを感じさせようとしている。

・「桥之美」(「橋の美しさ」)

画家の視線から、違う環境で橋にもたらされた美的効果を説明する教材である。審美的な角度という新しい角度から橋の機能を見直させようとしている。

・「苏州园林」(「蘇州の庭園」)

蘇州の庭園を紹介する教材である。蘇州の庭園の建築技術などを説明することによって、中国の美しい庭園芸術を勉強させようとしている。説明的文章を勉強する際、物事の特徴をとらえて順序よく、条理を明確に説明することを身に付けさせようとしている。

・「故宫博物院」(「故宫の博物院」)

故宫博物院の構造及び歴史を説明している。中国の伝統的な建築技術に対する誇りを持たせようとしている。説明の順序を明確にして、日常でよく用いる説明の方法を学ばせようとしている。

・「说“屏”」(「屏風を説く」)

屏風の機能を説明している文章である。今の時代で新しい機能を与えられた屏風の魅力を感じさせるとともに、説明的文章の読解力をさらに高めようとしている。

八年上 第四单元

・「大自然的語言」(「大自然の言語」)

生物の世界における季節の現象と人類との関係を語る教材である。大自然を保護する＝人類を保護するという考え方を生徒が理解することを要求する文章である。全篇の説明から問題を分析する能力と文章の内容をまとめる能力を求められている。例示という説明の方法を教えようとしている。

・「奇妙的克隆」(「奇妙なクローン」)

クローンの概念からクローン技術の発展、さらには人類のクローンに対する考えまで説明する文章である。説明的文章の構成を理解させようとしている。

・「阿西莫夫短文两篇」(「アシモフの二つの短文」)

① 「恐龙无处不在」(「恐竜はどこでもいる」)

② 「被压扁的沙子」(「上げられた砂」)

恐竜と上げられた砂の例を引用して、科学の各分野は緊密につながっているという理論を証明する教材である。

・「生物入侵者」(「生物の侵入者」)

「生物の侵入」という概念とその影響を説明する教材である。科学技術が人類の生活にもたらす影響と変化を気づかせ、科学的な観察と思考能力を教えることを意図している。説明的文章の書き方を学ばせるとともに、エコ意識と社会的な責任感の重要性をアピールしている。

・「落日的幻觉」(「夕日の幻覚」)

光学の知識を用いて、夕日の幻覚を説明している。物理の知識を与えるだけでなく、科学的な観察能力を育てようとしている。

九年下 第四单元

- ・「事物的正确答案不止一个」(「物事の正しい答えは一つだけではない」)

人類がすばらしい創造力を備えることを主張している。常に好奇心を持ち知識を積むことによって、新しい発想が必ず生じるとアピールしている。

- ・「应有格物致知的精神」(「‘格物致知’の精神を備えるべきだ」)

物事を深くまで考察して知識を得るという考えを納得させようとしている。ノーベル賞受賞者の語りによって、実践から知識を獲得することの重要性を説明している教材である。

- ・「短文两篇」(「二つの短文」)

① 「谈读书」「読書を論じる」

② 「不求甚解」「納得とは求めない」

読書に関する正しい読み方を語る教材である。

- ・「中国人失掉自信力吗」(「中国人は自信を失ったのか」)

特定の時代背景における国民の闘争意識を呼び起こす文章である。「国は亡くしていいが、民族の自信は無くしてはいけない」と筆者は強く主張している。

以上の教材の内容を見るとわかるように、中国の中学語文教科書は、科学と日常生活、人類の知恵、自然と人類の関係、物事に対する考え方など幅広い範囲の内容を取り上げている。幅広い題材で中学生の学習意欲を高めようとする意図がうかがえる内容と構成である。こうした多様な題材を深く扱おうとするならば、教師には、地理、歴史、芸術など様々な分野に関する専門的な知識が求められることになるのだろう。題材について専門的なことを教えるのが語文科の説明的文章指導ではないのだから、それは不要であると考えられる。また、教材の内容について、「中国の石拱橋」や「蘇州の庭園」などのような科学技術を題材として扱う教材は特に多く見られる。これらの教材は主に建築学や園芸学などの分野に関する知識と中国がこれらの分野でもつ科学的な成果を紹介している。そして、教師用指導書では、中国の科学技術に対する誇りを持たせようなどの学習目標も明確に指摘されている。ここから、愛国心を高めるといった教材編集者の意図も推測できると考える。

次は中国の説明的文章教材の構成について考察していきたい。第1章で述べたとおり、中国の語文教科書では各単元の学習目標に応じて、教材のジャンルが設定されている。上にまとめた教材のリストを見るとわかるように、説明的文章教材はジャンルによって単元ごとに編集され、教科書に位置づけられている。実は説明的文章だけではなく、文学的な文章や古文なども学習目標に応じて、単元ごとに編集されている。これは中国の教科書教材の編集における特徴だと考えられる。

また、各学年で扱われている教材の内容をよく見ると、次のようなことがわかる。一年生、二年生の教材では、「雲を見て天気を知る」や「橋の美しさ」などのような、物事の性質や状況を題材とする説明文が多く扱われている。そして、三年生になると、「物事の正しい答えは一つだけではない」などのような、筆者が自分の考えを示す論説文が多く見られるようになる。このように、低学年から高学年にかけて、説明文から論説文へと発展するように、教材が構成されていると考えられる。

第3節 説明的文章教材の内容と構成における日中の比較

第1節と第2節では、日中の教科書に載っている説明的文章教材の内容と構成を分析した。第3節では、その分析をふまえて、前期中等教育の段階で扱われている説明的文章教材の内容と構成における両国の共通点と相違点を明らかにしたい。

まず、日本と中国の共通点について考察する。

第1節で述べたとおり、説明的文章教材に関する言語活動例は、一年生の「文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと」から、三年生の「説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること」へと展開している。日本の国語科の授業では、一年生から始まり、学年があがるに従って、より高い読解力が求められる。そして、高学年になると、より高い表現力や、それを支える論理的な思考力も求められる。それに対して、中国の語文科の授業では、低学年の「情報をたくさん与えてくれる」説明文から、高学年の「筆者自分の考えを示す論説文」まで発展する。その過程で、「文章を理解すること」から「文章を理解した上で自分の考えをもつこと」に至り、生徒の読解力と表現力、論理的な思考力を高めるようになる。

以上のように考えると、日中両国の説明的文章教材の構成には共通点があると考えられる。すなわち、両国の教材は、ともに、情報を得ることからフィードバックまでという認知力発達のプロセスに合っているように構成されているのではないか。

次に、日本と中国の相違点について考察する。

前にも述べたように、日本の教育出版の国語科教科書では、説明的文章教材は、文学教材と混じる形で「読むこと」の領域に位置づけられている。それに対して、中国の人民教育出版社の語文科の教科書では、各単元の学習目標に応じて、教材のジャンルが設定されている。説明的文章教材もジャンルによって単位ごとに編集されている。例えば、前にまとめた教材のリストの中で、八年生（上）の第三単位では中国の建築という題材に関する五つの説明文が取り上げられている。また、九年生（下）第四単位では、四つの論説文が取り上げられている。中国の語文科教科書では、説明的文章教材のジャンルが明確に分けられているため、一定の指導時間内で集中的に、特定の説明的文章教材について学ばせることができる。中国の語文科授業でよく見られるこのような指導の方法は、説明的文章指導において効果的であると考えられる。

また、中国の教科書では、前に述べたように、八年生（上）の第三単位で扱われている

「中国の石拱橋」や「蘇州の庭園」など、科学技術を題材として扱う教材が多く見られる。中国が各分野における科学的な成果を紹介するこれらの教材は、中国の科学技術に対する誇りを持たせようというねらいをもつと考える。ここから、愛国心を高めるといった指導のねらいが明確になるとともに、教科書編集者の意図も推測できると考えられる。日本の教科書では、愛国心を高めるといった意図は明示されにくい。内容をもつ教材は少ない。このことは、説明的文章教材の内容における相違点だといえるだろう。

次章では、日中における同じ題材を扱う説明的文章教材を取り上げて、両国の説明的文章教材とその指導を具体的に比較する。

第3章 前期中等教育における日中の説明的文章教材

第3章では、日中両国の前期中等教育において扱われている説明的文章教材を具体的に考察する。ここでは、日本の説明的文章教材として、教育出版発行の国語科教科書『伝え合う言葉 中学国語2』（2011年文部科学省検定済教科書）に載っている「アオスジアゲハとトカゲの卵」を取り上げる。また、中国の説明的文章教材としては、人民教育出版社の教科書『語文（七年上）』（義務教育課程標準実験教科書、2007年初審通過）に載っている「绿色蝈蝈（緑のキリギリス）」を取り上げる。両教材を選定したのは、「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝈蝈」とは同じく昆虫の生活習慣に着目した文章であることから、類似した内容の教材を比較することによって、前期中等教育の説明的文章教材におけるそれぞれの特徴が明らかになると考えられるからである。

第1節 「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝈蝈（緑のキリギリス）」の比較

第1項 比較する教材について

「绿色蝈蝈（緑のキリギリス）」は、上に記したように、中国の人民教育出版社の教科書（中一上）に掲載されている。この教材で筆者は、科学的な観察を通じてキリギリスの外在的な特徴と生活習慣を紹介している。一読するだけで、筆者のファールブルが生物に対して、特に昆虫に対して特別の感情を持っていることがわかる教材である。なお、ファールブルの作品を取り上げた教材というと、日本の小学校の国語科教科書に「フシダカバチの秘密」という説明的文章教材が載っていたことがある。フシダカバチがゾウムシだけを獲物として捕らえる秘密を説明する文章であったが、今は載っていない。

一方、日本の教育出版の教科書（中二）に「アオスジアゲハとトカゲの卵」という教材が掲載されている。この教材で筆者はアオスジアゲハとトカゲの卵という二つの例によって、生命に対する「動的平衡」を主張している。

以下、こうした両教材を分析しながら、比較を進める。

第2項 「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝈蝈」の教材研究

1. 「アオスジアゲハとトカゲの卵」教材研究

以下、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の本文の叙述に即して、その分析と考察を述べる。

アオスジアゲハとトカゲの卵（題名）

読み手はアオスジアゲハとトカゲの卵の間に、何か関連があるかという疑問をもち、文章を読み続けていく。ここから、「アオスジアゲハとトカゲの卵」という題名には読み手の興味を呼び起こす効果があると考えられる。

①私たち生物学者はずっと、「生命とは何か」という問題を解明するために、生命現象をできるだけ細かく分けて調べてきた。全ての生物は細胞からできている。細胞は、さらに

細かい小器官から成り立っている。だから言ってみれば、生物とはさまざまな物質からなる精密な機械とみなせる。そのように考えて、私たちは生命を分けることに邁進してきた。その結果、生物学者は、生物を構成するほぼ全てのタンパク質を明らかにすることに成功した。

②次に、生物学者は、それぞれの物質の役割を調べ始めた。生物をかたちつくっている物質の中から、特定の物質を取り除けば、何か不都合が起きるはずである。私たちは、ある物質を取り除いたマウスを観察した。

③ところが、マウスには何も不都合が起きなかった。餌をたくさん食べ、体重も順調に増え、元気に走り回っていた。いったいこの事実をどう理解したらよいのだろう。私たちは困惑した。そして、さまざまな可能性を考えた。しかし、一向に明確な答えは得られなかった。最後にある可能性が浮かび上がった。

④ひょっとすると、仮定自体がまちがっているのではないだろうか。生物がさまざまな物質からできた精密な機械であるという仮定。生物は、さまざまな物質から成り立っている。確かにそれは機械じかけで組み合わされているが、生命について考えるときには、もっと別の見方をする必要があるのではないか。

文章のはじめに、筆者は生物学者が行なってきた研究の目的を示している。すなわち、「生命とは何か」の問題を解明することである。ここで、研究の目的と全篇の基調について、読み手はひとまず納得できるだろう。この目的を探索するため、生物学者は生命現象をできるだけ細かく分けて調べてきた。そこから、生物が「細胞—小器官—タンパク質」の順で成り立っていることを明らかにした。続いて、生物学者はそれぞれの物質の役割を調べるため、生物がさまざまな物質からできた精密な機械であるという仮定を前提として、実験を始めた。実験に対する筆者の具体的な説明を通じて、読み手は前提—過程—結果について具体的なイメージを得ることができると考える。結局、特定の物質を取り除いたマウスには何も不都合が起きなかった。この結果に対する可能性は生物学者にもう一度仮定自体を考えさせた。そして、「生命について考えるときには、もっと別の見方をする必要があるのではないか」という疑問も出された。この疑問は生物学者自身だけではなく、読み手にとっても、非常に面白い問題だと考えられる。読み手にとっては、文章を読み続ける原動力がここから産まれるだろう。

⑤そんな折、私は、生物学者になるずっと以前のこと、小さな生き物に夢中だった時を思い出した。

⑥小学校へ通う途中に短大の敷地があり、その外周に沿ってクスノキが植えられていた。樹々の間を、いつもたくさんのアオスジアゲハが舞っていた。休みの日、私は、クスノキを一本ずつめぐってアオスジアゲハのサナギを探した。不思議なことに、サナギは意外なほど低い場所に、こっそり息を潜めて存在していることがある。そんなサナギを発見する

いつも胸が高鳴った。

⑦サナギがついた枝を折って、家に持ち帰り、毎日観察した。緑色の硬い宝石のようなサナギは、日がたつにつれ、徐々に変化してくる。殻がだんだん薄くなり、内部がうっすらと透けて見えるようになる。中に複雑な文様が浮かび上がって切る。幼虫がチョウに変わる。これほど劇的な変容はない。その全てがこの小さなサナギの内部で進行しているのだ。

⑧二週間ほどすると、その日が来る。羽化だ。

⑨羽化したチョウは、二、三度ためらいがちに羽を閉じたり開いたりして、ふと次の瞬間に、空中へ飛び立つ。おぼつかないようできて、チョウは、どんどん高度を上げていく。やがて、チョウは視界から消える。

⑩アオスジアゲハの産卵と羽化は、春先から秋まで何度もそのサイクルが繰り返される。秋の一番最後に生まれた幼虫だけは、その年、チョウにならない。たつぷりとクスノキの葉を食べたあと、次の年の春へと新たな命をつなぐため、サナギの姿のまま、その冬を越す。

③ 落が終わった後、1行空いて、⑤段落の内容が示される。

「生命とは何か」という問題を探索するため行われた実験の結果には問題があった。筆者はほかの角度からこの問題を解明しようとして、読み手の納得を得ようとする。ここでは、筆者自身の、小学生の時のある出来事が例示として取り上げている。「羽化」という現象である。筆者はクスノキでアオスジアゲハのサナギを探して、家まで持ち帰って毎日観察した。アオスジアゲハのサナギが存在していた場所は「クスノキの低いところの枝」である。続いて、筆者は「羽化」について具体的に描いている。サナギは小さすぎて、中身は見えないが、筆者は「殻がだんだん薄くなり、内部がうっすらと透けて見えるようになる。中に複雑な文様が浮かび上がって切る」という劇的な変容を描写している。読み手にとっては、この描写の部分は非常に重要である。なぜなら、羽化の過程に対する描写は読み手に生き生きとしたイメージを効果的に与えると考えられるからである。羽化の日のことについて、筆者は「ためらいがちに羽を閉じたり開いたり」「空中へ飛び立つ」「高度を上げていく」などの描写を通じて、具体的に羽化の過程を説明している。その上で、「春先から秋まで何度もそのリサイクルが繰り返される。秋の一番最後に生まれた幼虫だけは、（中略）サナギの姿で冬を越す」ことを明らかにしている。羽化は自然的な現象で、季節の流れにつれ進行すると思われる。しかし、秋の一番最後に生まれた幼虫がサナギの姿で冬を越すことを知らない読者もいることだろう。この文章を読んで、新しい知識を得る中学生もいると考えられる。⑤～⑩段落の内容と書き方は、読者の知識を広げる可能性があるとともに、それを通じて効果的に読者の注目を引く働きもあるのではないかな。

⑪私は、クスノキを回ってサナギを採集し、それを虫籠に入れ、物置の奥の安全な場所

にそっとおいた。春先、初めて羽化するアオスジアゲハの可憐な姿を見たいと思ったからだ。やがて、冬がやってきた。私の日常にはとりたてて変化がなかった。友達と遊び、本を読み、学校に通った。そして、あろうことか、私はアオスジアゲハのことをすっかり忘れてしまったのである。

⑫春になり、学年が一つ上がり、クラス替えがあり、新しい友達ができ、気温があがり、夏が近いことを知らせた。短大のキャンパスのクスノキは青々と茂り、アオスジアゲハが舞う季節が来た。私ははっとした。その時になってようやく思い出したのだ。たくさんのサナギを採集して籠に入れて保管したことを。私は指を折って数えてみた。ゆうに七か月がたっている。これだけの時間が経過していて、サナギたちがそのままサナギであるはずはない。

⑬私は怖かった。しかし、同時に、私はそれを見ないでいることもできなかった。暗い倉庫に入り、籠を置いたはずの場所の前に立った。私は、籠をそっと持ち上げて手前に引き寄せた。なんの気配もなく、なんの音もしなかった。私は、籠を明るい場所に運んだ。

⑭十個以上あったはずのサナギはすべて羽化していた。羽化したアオスジアゲハは、ほとんどなんのお損傷もなく、からからに乾燥していた。まるで生きているかのように、羽の鮮やかなブルーを完璧に保っていた。

筆者はとりたてて変化がなかった日常生活で、採集され暗いところに置かれたアオスジアゲハのサナギのことをすっかり忘れてしまった。春になり、夏が近づくとともに、アオスジアゲハが舞う季節も来た。七か月が経った後、筆者はようやくアオスジアゲハのサナギのことを思い出した。「これだけの時間が経過していて、サナギたちがそのままサナギであるはずはない」と筆者は言っている。ここで筆者は、自分とサナギの間に起こった出来事を記述し、読み手も話の流れに沿って筆者の言葉を興味深く読み続けることになるだろう。すっかり忘れてしまったサナギのことを翌年の夏前に思い出したという叙述を読む際には、どんな変化があったのかという筆者の思いは、同時に、読者の思いにもなっていることだろう。羽化したアオスジアゲハが発見された瞬間の筆者に、読者も自らも重ねて読むことだろう。すなわち、読者の感覚は筆者の感情の変化と一緒に変わっていくのである。

⑮そういえばこんなこともあった。

⑯ある日、住宅のはずれの植え込みの陰に小さな楕円形の白い卵を見つけた。トカゲの卵だった。その場所にいつもトカゲたちが出沒するのを私は知っていたので、その卵がなんであるかすぐにわかった。

⑰私は、それをそっと持ち帰って、土を敷いた小箱に入れて毎日を観察した。乾きすぎないように、時々霧吹きで湿り気を与えた。しかし、何日待っても何事も起きなかった。トカゲの卵が孵化するのに、季節によっては二か月以上を要することまでは、同時の私に

はわからなかったのだ。

⑱待ちきれなくなった私は、卵に微小な穴をあけて内部を見てみようと思決意した。もし内部が“生きて、いたらそっと殻を閉じればいい。私は準備した針とピンセットを使って、注意深く、殻を小さく四角形に切り取ってのぞき穴を作った。するとどうだろう。中には、卵黄をおなかに抱いた小さなトカゲの赤ちゃんが、不釣り合いに大きな頭を丸めるように静かに眠っていた。

⑲次の瞬間、私は見てはいけないものを見たような気がして、すぐに蓋を閉じようとした。断片で穴を塞ごうとしたが、そこには隙間が残った。まもなく私は、自分が行ってしまったことが取り返しのつかないことを悟った。殻を接着剤で閉じることができても、そこに息づいていたものを元通りにすることはできないということを。いったん外気に触れたトカゲの赤ちゃんは、徐々に腐りはじめ、形が溶けていった。

⑳その後、私は生命現象を研究することを職業とするようになった。けれどもそれは、虫好きが高じてそのまま生物学者になったというわけではない。むしろ、このような子どものころに親しんだ小さな生命のことを忘れて、生物学者となったのだ。

筆者は似たような出来事を思い出した。彼は、「住宅のはずれの植え込みの陰」に「小さな楕円形の白い卵」を見つけ、持ち帰って小箱に入れて観察した。トカゲの卵の孵化には二か月以上が必要だと知らずに、土を敷いて霧吹きもやってあげた。知識のある読者であれば、こうしたやり方は幼い行動に見えるかもしれないし、子どもの行為に共感するかもしれない。知識のない読者であれば、新たなことを学びながら、興味を持って読み続けるだろう。いずれにしても、その後に変なことが起こったことがわかる。子どもの無知ゆえに待ちきれなくなった筆者は、生物の自然的な成長規律を破って、トカゲの卵に穴をあけようと思決意した。学校の実験のように、「準備した針とピンセットを使って、注意深く、殻を小さく四角形に切り取ってのぞき穴を作った」。すると、トカゲの赤ちゃんがやっと見えた。筆者は「卵黄をおなかに抱いた小さなトカゲの赤ちゃんが、不釣り合いに大きな頭を丸めるように静かに眠っていた」と描写している。しかし、筆者の行為のせいで、空気に触れたトカゲの赤ちゃんはだんだん腐っていく。読者は、トカゲの卵に対して行ってしまった行為を筆者自身がどのように受け止めたのか、「見てはいけないものを見たような気がして」や、「自分が行ってしまったことが取り返しのつかないことを悟った」という叙述をもとに考えさせられるだろう。

㉑段落で、筆者は、⑲段落までに記した出来事を経験した後、生命現象の研究を職業とすることを決心したという。虫好きが高じたわけでもなく、幼い頃に親しんだ小さな生命を忘れて生物学者になったのだという。㉑段落は、過去の回想が終わり、①～④段落と同じように生物学者としての筆者を意識させるとともに、㉑段落以降の内容に対する期待を高める効果があると考えられる。

②①私たち生物学者は、生命をさまざまな物質が寄り集まってできた非常に精密な機械であるとみなして研究を進めてきた。しかしそれは、時間を止めて、生命現象を観察したとき、そのように見えるにすぎない。

②②研究を続けてわかってきたことだが、生命は、実は、時間の流れとともに、絶え間ない消長、交換、変化を繰り返しつつ、それでいて一定の平衡が保たれているものとしてある。生命は、恒常的に見えて、いずれも一回性の現象である。そして、それゆえにこそ価値がある。私は、そのような生命を動的平衡にあるものと呼びたい。

②③マウスのように、生命のもつ動的な仕組みは、やわらかく滑らかであるので、操作的な介入を吸収しつつ、新たな平衡を生み出そうとする。しかしながら、操作的な介入によって平衡状態が失われてしまえば、生命は大きな痛手を受けることになる。ちょうどトカゲの卵にうかった小窓のように。

②④その一方で、動的平衡は、不要な介入さえしなければ、ほかになんの手助けも全く必要とせず、自律的にその運動をつかさどることができる。全てのプロセスは、時間の流れとともに、人知らず進み、開き、やがて閉じる。倉庫の暗闇の中でその一生を終えたアオスジアゲハのように。

②⑤生命は、順を追ってひとたび作られると、再び逆戻りすることのできない、のり付けされた折り紙細工に似ている。戻せないのは、そこに時間が折りたたまれているからである。誰も時計の針を一瞬も止めることはできない。

②⑥結局、私たちは、自然の流れの前にひざまずく以外に、そして生命のありようをただ記述すること以外に、なすすべはないのである。それは実のところ、あの少年の日々からすでにずっと自明のことだったのだ。

②⑦段落が終わった後、1行空いて、②①段落の内容が示される。

筆者は文章のはじめの部分（①～④段落）と呼応して、ここでもう一度、仮定自体のことに触れる。しかし、今回は「それは時間を止めて、生命現象を観察したとき、そのように見えるにすぎない」と仮定自体を否定している。これも前の失敗した実験の結果の説明だと見られる。結論から言うと、失敗した原因は生物学者たちが「生命の動的平衡」を気づいていなかったからである。「研究を続けてわかったことだが」と書かれていることから、多くの研究に基づいて、「生命の動的平衡」の概念はまとめられたと考えられる。生命は、「時間の流れとともに、絶え間ない消長、交換、変化を繰り返しつつ、それでいて一定の平衡が保たれているものとしてある」と筆者は定義している。動的平衡の「全てのプロセスは、時間の流れとともに、人知らず進み、開き、やがて閉じる」のであり、「動的平衡は、」「自律的にその運動をつかさどることができる」のである。生物にとって、生命のもつ動的な仕組みに操作的な介入をするのが許されるのかどうか、これは生物学者にとって重視しなければならない問題である。平衡状態を保つのが大事であることは確かであろう。筆者は、トカゲの卵に小窓をあけるような行為、つまり操作的に生命に介入すること

を反対する。筆者は「生命が、順を追ってひとたび作られると、再び逆戻りすることのできない、のり付けされた折り紙細工に似ている」ものであることを指摘し、私たち、つまり生物学者は「自然の流れの前にひざまずき「生命のありようをただ記述する」しかないことを提唱する。

この教材の冒頭に「私たち生物学者は」とある。そして㉑段落の最初にも同じ表現がある。つまり最後の段落の「私たち」とは生物学者のことである。しかし、生物学者ではない読者にとっても、最後の部分は、いわば心の洗礼を促すと考えられる。「生命とは何か」という問題を、ほとんどの人は深くまで考えたことがないかもしれない。生命の本質について、筆者は哲学的な言葉を使い、読者に対して説明している。この教材を読む読者は、筆者の説明に納得するとともに、心のどこかに生命の神秘と魅力に驚くのではないか。それで、そのように予想すると、読者に、今まで知らなかった生命に関する知識を与え、生命に対する新たな観点を提示する点に、筆者がこの文章を書いた意図があるとも考えられる。

以上、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の本文の叙述に即して、その分析と考察を述べた。

この文章は福岡伸一氏がこの教科書のために抜粋・加筆したものである。具体的には、①～⑤段落は筆者が加筆したもので、⑥～㉑段落は筆者の著書である『生物と無生物のあいだ』（講談社（2007））の p. 279～281、p283～285 から抜粋したものである。読み手を中学校二年生に設定したことによって、この文章は出典より分かりやすい説明になっていると考えられる。

本教材は、全篇を通じて、筆者の福岡伸一氏が持つ、生物に対する愛着の情と生命に対する敬畏の感情を深く感じられる説明的文章教材である。子供の頃に観察が好きで、アオスジアゲハとトカゲの卵についての出来事を経験した筆者は、「生命とは何か」の問題を説明するために「生命現象をできるだけ細かく分けて調べる」ことの限界にふれ、「生物がさまざまな物質からできた精密な機械である」という仮定を否定し、「動的平衡」の概念を強調する。これらの一連の行為は、筆者が神秘的な生命を探索するために取り込んだことなのである。筆者の生物に対する強い思いに支えられてこの文章は成立していると考えられる。

説明的文章では、あることを筋道立て明確に説明するための表現の仕方が非常に重要である。本教材は、「生命とは何か」という抽象的な問題に対して、それにかかわる具体的な話として、筆者が実際に体験した三つの出来事を具体的に語っている。まず、マウスを使って生命現象をできるだけ細かく分けて調べてきた例を挙げる。次は、小さい頃アオスジアゲハのサナギを見つけて、羽化というその劇的な美しいメタモルフォーセに感動していた例を挙げる。羽化の瞬間を今まで見たことがない読者でも、この美しい文章から、その感動がしっかりと伝わってくるだろう。最後の一つはトカゲの話の例である。トカゲの卵を拾ってきて孵化するのを観察していたかつての筆者は、待ちきれなくなって一生忘れられないことをしてしまった。このように筆者が自分自身の体験談を具体的に文章に書

き込むことによって、読者は筆者の心情を体験できるし、それによって、文章の説得力も高まると考えられる。筆者は中学生を読者として想定して自分自身の経験を語り、文章に臨場感と真実味を与える。読者は、「筆者にこんなことがあったのか」「筆者はこんなことをやったのか」と受け止めながら、自分もその場において筆者と同じことを体験するかのような感覚を生じさせる。生物学者としての立場から述べるはじめの部分（①～④段落）においては、読者の知識で理解可能な範囲での専門的な表現や用語を使って、「生命とは何か」という問題を生物学の角度から示している。生物学者が「生命現象をできるだけ細かく分けて調べてきた」経緯と成果が簡潔に記されており、理解しやすい。その一方で、少年時代の思い出である⑤～⑩段落では、読者がよりイメージしやすく心情に響くような描写表現が巧みに使われているのである。そしてまた、おわり（⑪段落以降）では、はじめ（①～④段落）と同じように、抽象的な内容が端的に述べられる。ただし、その中には「ちょうどトカゲの卵にうがった小窓のように。」「倉庫の暗闇の中でその一生を終えたアオスジアゲハのように。」といった、⑤～⑩段落の具体的な話をふまえた文がある。こうした述べ方によって、読者は、⑩段落までの内容と関連づけながら、具体化を図りながら読めるようになっている。

小学校の説明文教材で序論・本論・結論（はじめ・なか・おわり）の構成がはっきりしたものがあある。本教材「アオスジアゲハとトカゲの卵」は、中学校の教材であるが、同じような見方で文章の構成がとらえられるのではないか。つまり、はじめ＝①～④段落、なか＝⑤～⑩段落、おわり＝⑪～⑮段落、という構成である。全体を見据えて部分（はじめ・なか・おわり）が構成されていることが、読者にもよくわかる書き方である。文章構成にも、筆者の書き方の巧みさがうかがわれる教材である。

2. 「緑色蝸蝓」教材研究

続いて、「緑色蝸蝓（緑のキリギリス）」の本文の叙述に即して、その分析と考察を述べる。

緑色蝸蝓（題名）

《日本語訳》

緑のキリギリス

「緑のキリギリス」という題名を一見して、この文章では日常生活でよく見られるキリギリスのことに関する題材が扱われることがわかる。このように私たちの身の回りの物事に関する題材を扱う書き方は、読み手の共感を起こしやすいと思われる。また、「緑」というのは、キリギリスの色である。この題名は、読み手にキリギリスの外在的な特徴を想像させながら、筆者がキリギリスにもつ感情も感じさせる効果があると考えられる。

①现在是7月中旬，村里今晚在庆祝国庆。当孩子们围着欢乐的篝火跳跳蹦蹦，当鼓声随着每支烟花的升空而响起时，我独自一人，在阴暗的角落里，倾听着田野的节日音乐会，田野里的节目要比此时在村庄广场上上演的节目更加庄严。

②夜已晚了，夜晚9点的天气比较凉爽，蝉已不再鸣叫了。它白天唱了一整天，夜晚来临，也该休息了，但它的休息常常被扰乱。在梧桐树浓密的枝叶里，突然发出哀鸣似的短促而尖锐的叫声。这是蝉在安静的休息中，被夜间狂热的狩猎者绿色蝈蝈捉住而发出的绝望哀号。

《日本語訳》

①今は七月の中旬で、村中の人々が建国記念日を祝っている。子供たちは楽しくかがり火を囲んで跳んでいる。太鼓の音の伴奏で花火が上にあがっている時に、私は一人で暗い隅で田野のコンサートを聞いている。大自然の演出は、村中の演出より更に厳肅だ。

②夜更けになった。夜九時の空気が涼しくて、セミも鳴かない。夜になれば、昼間から鳴いて続けてきたセミは休み中のはずだ。しかし、その休みはよく邪魔される。アオギリの蔭から、いきなり悲しそうに聞こえる短くてけたたましい声がした。それはセミが静かに休む時に、夜間の熱狂的な獵者であるキリギリスに捕まえられて出した絶望な号泣だ。

冒頭で筆者は「今は七月の中旬」だと書いている。「七月の中旬」と言えば、ちょうどキリギリスの一番活躍する時期である。筆者はまずこの文章が書かれた季節を表明している。そして、村中の人々は楽しく建国記念日を祝っている中で、筆者は田野で大自然のコンサートを聞いている。場所は「田野」だと書かれている。「いつか」「どこで」「誰が」「何を」に関する叙述を通じて、読み手に文章全体を概観させる。「大自然の演出」「厳肅」などの言葉は読み手に神秘感を与えて、読み手の興味を引くこともできると考えられる。そして、村中のにぎやかな雰囲気との対比が鮮明的にされ、筆者は「大自然の演出は、村中の演出より更に厳肅だ」と言っている。「厳肅」という言葉から筆者が大自然に対する崇敬の感情は伝わってくる。この感情は、第三段落の「聞こえるわずかのキリギリスの声は非常に和やかで、夜の静寂の雰囲気にとても合う」のところからも伝えられる。

③让我们远离喧嚣去倾听，去沉思吧。当被捉住的蝉还在挣扎的时候，梧桐树梢上的节目还在进行着，但合唱队已经换了人。现在轮到夜晚的艺术家上场了。耳朵灵敏的人，能听到弱肉强食处四周的绿叶丛中，蝈蝈在窃窃自语。那像是滑轮的响声，很不引人注意，又像是干皱的薄膜隐隐约约的窸窣作响。在这喑哑而连续不断的低音中，时不时发出一阵非常尖锐而急促、近乎金属碰撞般的清脆响声，这便是蝈蝈的歌声和乐段，其余的则是伴唱。尽管歌声的低音得到了加强，这个音乐会不管怎么说还是不起眼，十分不起眼的。虽然在我的耳边，就有十来个蝈蝈在演唱，可它们的声音不强，我耳朵的鼓膜并不都能捕捉到这微弱的声音。然而当四野蛙声和其他虫鸣暂时沉寂时，我所能听到的一点点歌声则是非常柔和的，与夜色苍茫中的静谧气氛再适合不过了。

緑色の蝸蝓啊，如果你拉的琴再响亮一点儿，那你就是比蝉更胜一筹的歌手了。在我国北方，人们却让蝉篡夺了你的名声！

《日本語訳》

③騒々しさから離れて、深く考え込もう。捕まえられたセミが必死に反抗している間に、アオギリの枝での演出はまだ続いているが、主役はもう変わった。今回は夜のアーティストの番だ。耳が利く人は、キリギリスが弱肉強食の草むらの中でひそひそと独り言を言っている声が聞こえる。それは滑車の音に似ていて、目立たないが、乾いている紙のガラガラという音にも似ている。この低い連続的な低音の中で、時々非常に鋭い金属の音に近い声が出てくる。それはキリギリスの歌と楽章で、ほかのすべては伴奏だ。低音が強くなってきて、どう聞いてもこのコンサートは地味だ、非常に地味だ。私の耳のそばに十匹ぐらいのキリギリスは歌っているが、その歌声は耳の鼓膜もとらえない弱い声だ。しかし、蛙とほかの昆虫が黙っていれば、聞こえるわずかのキリギリスの声は非常に和やかで、夜の静寂の雰囲気にとっても合う。緑のキリギリス、もしあなたの声をもっと大きくなれば、あなたはセミより優秀な歌手だ。しかし、我が国の北方では、あなたの栄耀はセミに奪われてしまった。

本教材は主にキリギリスの外在的な特徴と生活習慣について書かれたものであるが、実は声もキリギリスの外在的な特徴を観察する際に忘れてはいけない点である。「それは滑車の音に似ていて、目立たないが、乾いている紙のガラガラという音にも似ている。この低い連続的な低音の中で、時々非常に鋭い金属の音に近い声が出てくる。それはキリギリスの歌と楽章で、ほかのすべては伴奏だ。低音は強くなってきて、どう聞いてもこのコンサートは地味だ、非常に地味だ」という表現を通して、読者はキリギリスの出す声を具体的に理解する。夜のコンサートの話は、読者にキリギリスの声を類推させる効果的な比喩的例示だと思われる。

④在 6 月份，我捉了不少雌雄的蝸蝓关在我的金属网罩里。这种昆虫非常漂亮，浑身嫩绿，侧面有两条淡白色的丝带，身材优美，苗条匀称，两片大翼轻盈如纱。

《日本語訳》

④6 月中、私は数多くのメスとオスのキリギリスを捕まえて、金属の網に置いた。この昆虫は非常にきれいで、全身は緑色で、側面は二つの淡白いリボンが付いている。スタイルはよくて、二枚の大きな翼は紗のような透明な色をしている。

外在的な特徴として、「非常にきれいで、全身は緑色で、側面は二つの淡白いリボンが付いている。スタイルはよくて、二枚の大きな翼は紗のような透明な色をしている」と描写している。ほとんどの読者にとっては、キリギリスの外在的な特徴は知っているはずだと思われる。しかし、筆者はいきいきとした描写を通じて、読者にキリギリスの新しいイメ

一ジを想像させ、共感を持たせるという目的も達せると思う。取り上げる対象に寄り添い、読者にも寄り添うという、説明的文章教材の筆者のあるべき姿をうかがうことができる述べ方である。

⑤关于食物，我遇到了喂养螽斯时同样的麻烦。我给它们莴苣叶，它们吃了一点儿，但不喜欢。我必须另找食物，它们大概是要鲜肉吧，但究竟是什么呢？

⑥清晨，我在门前散步，突然旁边的梧桐树上落下了什么东西，同时还有刺耳的吱吱声，我跑了过去，那是一只蝈蝈正在啄着处于绝境的蝉的肚子。我明白了，这场战斗发生在树上，发生在一大早蝉还在休息的时候。不幸的蝉被活活咬伤，猛地一跳，进攻者和被进攻者一道从树上掉了下来。有时我甚至还看到蝈蝈非常勇猛地纵身追捕蝉，而蝉则惊慌失措地飞起逃窜。就像鹰在天空中追捕云雀一样。但是这种以劫掠为生的鸟比昆虫低劣，它是进攻比它弱的东西，而蝈蝈则相反，它进攻比自己大得多、强壮有力得多的动物，而这种身材大小悬殊的肉搏，其结果是毫无疑问的。蝈蝈有着有力的大颚、锐利的钳子，不能把它的俘虏开膛破肚的情况极少出现，因为蝉没有武器反驳，只能哀鸣踢蹬。

⑦我笼里的囚犯的食物找到了，我用蝉来喂养它们。它们对这道菜吃得津津有味，以至于两三个星期间，这个笼子里到处都是蝉肉被吃光后剩下的头骨和胸骨，扯下来的羽翼和断肢残腿。肚子全被吃掉了，这是好部位，虽然肉不多，但似乎味道特别鲜美。因为在这个部位，在嗦囊里，堆积着蝉用喙从嫩树枝里吮取的糖浆甜汁。是不是由于这种甜食，蝉的肚子比其他部位更受欢迎呢？很可能正是如此。

⑧为了变换食物的花样，我还给蝈蝈吃很甜的水果：几片梨子，几颗葡萄，几块西瓜。这些它们都很喜欢吃。就像英国人酷爱吃用果酱作调料的带血的牛排一样，绿色蝈蝈酷爱甜食。也许这就是它抓到蝉后首先吃肚子的原因，因为肚子既有肉，又有甜食。

⑨不是在任何地方都能吃到沾糖的蝉肉的，因此别的东西也得吃。对于金龟子一类的昆虫，它毫不犹豫地都接受，吃得只剩下翅膀、头和爪。

⑩这一切都说明蝈蝈喜欢吃昆虫，尤其是没有过于坚硬的盔甲保护的昆虫。它十分喜欢吃肉，但不像螳螂一样只吃肉。蝈蝈这蝉的屠夫在吃肉喝血之后，也吃水果的甜浆，有时没有好吃的，甚至还吃一点儿青草。

《日本語訳》

⑤食物については、バッタを飼う時と同じようなトラブルがあった。私が莴苣で飼ってあげると、キリギリスは少しだけ食べて、莴苣があまり好きではないように見える。ほかの食物を探すしかできない。キリギリスが食べたいのは新鮮な肉だろうか。一体何だろう。

⑥早朝、庭を散歩していた時、突然隣のアオギリから何かが落ちてきた。私は鋭い音に沿ってそこまで走って試してみたら、キリギリスが瀕死のゼミの腹をついばんでいる音だとわかった。この戦いは、ゼミが朝早く休んでいる中で、アオギリの枝で起きた。不幸なセ

ミは生きながら噛まれて、ふっと飛んでいったら、攻撃者と一緒にアオギリの枝から落ちた。キリギリスが勇敢にもセミを追いかけて、セミが大パニックの中で飛んで逃げるシーンがよく見られる。空の上で鷹が雲雀を追いかけるのと似ている。しかし、このような、自分より弱いものを攻める強奪のやり方で生きていく鳥は、昆虫より卑劣だ。キリギリスは自分の体型より巨大で、強いものを攻めるのが好きだ。この激しい戦いでは体型に大きな差があるが、その結果ははっきりとした違いがない。キリギリスは有力な顎とパンチのような前脚を持っていて、獲物を殺せないことはめったにない。セミは武器を持っていないので、反抗ができない。

⑦私の籠中の囚人の食物を見つけられた。私は彼らをセミで飼う。キリギリスにとっては、この食物は美味しすぎて、二三週間の間に籠の中に残ったのはほとんど骨だ。腹の部分はすべて食べられた。それはいい部分で、肉は少ないが非常に美味しい。この部分には、セミが木の葉から取った甘い汁が溜っている。その甘味があるから、セミの腹は他の部分よりもっと人気があるのではないか。その可能性が高いと考えられる。

⑧食物の種類を豊富にするため、私はキリギリスを甘い果物で飼う：梨、葡萄、西瓜とか、そのすべてが受け入れられた。イギリス人が血のついたビーフを好むように、キリギリスは甘いものが好きだ。たぶんそれが、キリギリスがセミを掴んだら先に腹を食べる原因だと考えられる。腹の部分には肉があるし、甘味もあるからだ。

⑨どこでも甘味を含んでいるセミの肉を食べられるわけではないので、ほかのものも食べなければならない。テントウムシのような昆虫は、キリギリスは全部を受け入れ、食べ終わって残ったのは骨だけだ。

⑩以上のすべてから、キリギリスは昆虫が好きで、特に硬い甲に覆われていない昆虫が好きということが証明できる。肉が好きだが、カマキリのように肉ばかり食べるのとは違う。キリギリス、このセミのハンターはセミを食べ終わったら、果物の甘い汁も食べる。美味しいものがない時、草も少し食べるのだ。

ここでは、キリギリスの生活習慣に関して、主に食習慣について書かれている。「昆虫が好きで、甘い果物や野菜も好き」というのはキリギリスの食習慣だと思われる。「キリギリスが瀕死のゼミの腹をついばんでいる音だ」「キリギリスは有力な消化器官を持っていて、獲物を殺せないことはめったにない。セミは武器を持ってないので、反抗ができない」「キリギリスにとっては、この食物は美味しすぎて、二三週間の間に籠の中に残ったのはほとんど骨だ」などの記述から、読者は勇敢でセミ好きというキリギリスのイメージを得るだろう。しかも、獲物を選ぶ時、自分より弱いものを攻める鳥類と違って、自分より強くて巨大なものを攻めるのが好きだと筆者は言っている。こうした書き方を通じて、読者は昆虫に対する知識を充実させながら、筆者のキリギリスに対する愛着を感じとるのではないか。

⑪蝸蝓也有着同类相食的现象。诚然，在我的笼子里，我从来没见过像螳螂那样捕杀姊妹、吞吃丈夫的残暴行径，但是如果一只蝸蝓死了，活着的一定不会放过品尝其尸体的机会的，就像吃普通的猎物一样。这并不是因为食物缺乏，而是因为贪婪才吃死去的同伴。

⑫撇开这一点不谈，蝸蝓是彼此十分和睦地共居在一起的，它们之间从不争吵，顶多面对食物有点儿敌对行为而已。我扔入一片梨，一只蝸蝓立即占住它。谁要是来咬这块美味的食物，出于妒忌，它便踢腿把对方赶走。自私心是到处都存在的。吃饱了，它便让位给另一只蝸蝓，这时它变得宽容了。这样一个接着一个，所有的蝸蝓都能品到一口美味。嗉囊装满后，它用喙尖抓抓脚底，用沾着唾液的爪擦擦脸和眼睛，然后闭着双眼或者躺在沙上消化食物。它们一天中大部分时间都在休息，天气炎热时尤其如此。

《日本語訳》

⑪キリギリスの中にも同類相食の現象がある。確かに、私はカマキリのように兄弟を殺したり、夫を食べたりする凶暴的な行為を籠の中で見たことがない。しかし、もしあるキリギリスが死んだら、生きているキリギリスは普通の獲物を食べるように死体を食べる。そのチャンスを見逃さない。それは食物が足りていないのではなく、貪欲で死んだ仲間を食べるのだ。

⑫それはそれとして、キリギリスは仲良く共生している。喧嘩はしないが、ただ食物に対するトラブルが起きやすい。私は梨一枚を入れたら、あるキリギリスが直ちにそれを占有する。ほかのキリギリスが来ると、すぐ追いはらうのだ。利己的な心はどこでも存在する。お腹がいっぱいになったら、食物を次のキリギリスに譲る。このように次から次へと、すべてのキリギリスは美味しいものを食べられるのだ。お腹がいっぱいになったら、口で足に触れたり、顔と目を拭いたりして、それから目を閉じながら砂の上に横になって食物を消化する。キリギリスにとって、一日中のほとんどの時間を休みにあてている。特に暑い時期はそうだ。

文章の最後において、キリギリスの生活習慣について、特に同類の共生する習性について記されている。ここで述べられている「同類相食」の現象について、それを知っている読者にとっては知識の確認となるし、それを知らない読者にとっては新鮮な情報として受け止められることだろう。このような内容を記す筆者は、昆虫をよく観察している。また、「口で足に触ったり、顔と目を拭いたりして、それから目を閉じながら砂の上に横になって食物を消化する」といった人間にも通じる描写も巧みである。昆虫をよく見て上手に描き出す筆者の姿から、彼の昆虫に対する愛着を感じとることができるだろう。

以上、「绿色蝸蝓（緑のキリギリス）」の本文の叙述に即して、その分析と考察を述べた。前述のように、筆者はキリギリスに対して特別の感情を持っている。この感情を具体的

に言う、昆虫（自然）に対する愛着の感情と生命に対する尊敬の感情だと言えるだろう。例えば、「空の上で鷹が雲雀を追いかけるのと似ている。しかし、このような、自分より弱いものを攻める強奪のやり方で生きていく鳥は、昆虫より卑劣だ。キリギリスは自分の体型より巨大で、強いものを攻めるのが好きだ。この激しい戦いでは体型に大きな差があるが、その結果ははっきりとした違いがない。」という叙述から、そうした感情を深く感じ取ることができる。鷹は体型の大きさで相手に勝つ。それと違って、キリギリスの体型が小さいが、勇敢に相手と戦う。それを褒めるべきだと筆者は思っているのだ。すなわち、筆者は鷹を比較の対象として、キリギリスのセミ好きの食習慣を紹介しながら、キリギリスに対する自分の感情を表そうとしている。他の叙述でも、「この昆虫は非常にきれいで、全身は緑色で、側面は二つの淡白いリボンが付いている。スタイルはよくて、二枚の大きな翼は紗のような透明な色をしている」「緑のキリギリス、もしあなたの声をもっと大きくなれば、あなたはセミより優秀な歌手だ」といった表現にも、この感情は表れている。

こうした愛着を抱いているキリギリスについて、筆者は、文章の中でその呼び名を何回も変えている。キリギリスが夜セミを捕まえる時、筆者はキリギリスを「夜間の熱狂的な獵者」「セミのハンター」と呼んでいる。田野の演出で、キリギリスは「夜のアーティスト」「セミより優秀な歌手」と呼ばれ、実験と観察のため籠に閉じられたキリギリスは「私の籠中の囚人」と言われている。このように呼称を変えることによって、文章から伝えてくるイメージも変わるのである。呼称を変化させることによって、多様なイメージを読者に与えるのは、表現の仕方の工夫の一つであるといえるだろう。

さて、この教材では、キリギリスのイメージを読者にいきいきと伝えていることに成功していると思われる。そしてそれは、この文章の書き方によってもたらされている。

文章の書き方としての特徴の一つは、擬人法である。筆者は文章全体の記述において、上手に擬人法による表現を用いている。筆者は自分なりの言葉でキリギリスの生活習慣を記述しているが、その中で、「腹の部分はすべて食べられた」「キリギリスは全部を受け入れた」「ひそひそと独り言を言っている」「甘いものが好き」「仲良く共生する」など、キリギリスを人間であるかのように扱っていることがわかる表現を多く用いている。こうした表現によって、昆虫を愛する感情が伝えられると考える。

もう一つは、比較して述べる方法である。例えばキリギリスの声を説明する際、筆者は「緑のキリギリス、もしあなたの声をもっと大きくなれば、あなたはセミより優秀な歌手だ」と記し、セミの声と比較する。肉好きという食習慣を説明する際も、「肉が好きだが、カマキリのように肉ばかり食べるのとは違う」と述べて、カマキリと比較する。キリギリスがセミを追う時に関しても、「自分の体型より巨大で、強いものを攻めるのが好きだ」と記して、キリギリスと鷹との違いを表明する。また、「同類相食」の現象を述べる際には、「兄弟を殺したり、夫を食べたりする」というカマキリの残酷な食習慣と比較する。キリギリス以外の生き物が取り上げられることによって、読者に与える情報が増える。多くの情報に接し新たな知識を得ることも、読者が文章を読み進める原動力になる。そしてそれ

と同時に、何かと比較して述べることで、ギリギリの生活習慣の特徴を際立たせることができる。二重の意味で、ここでの比較の表現は有効であるといえるだろう。

第3項 教材の比較研究

「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「緑色蝸蝓（緑のギリギリ）」は、どちらも昆虫を取り上げた教材である。両教材からは、それぞれの筆者が持つ、昆虫を愛する感情が伝わってくる。「アオスジアゲハとトカゲの卵」の筆者である福岡伸一と、「緑色蝸蝓（緑のギリギリ）」の筆者であるファーブルは、それぞれ次のように説明されている。

・福岡伸一

1959 年東京生まれ。京都大学農学部卒。青山学院大学理工学部 化学・生命科学科教授。現在、「生命の動的状態」という概念を拡張し「動的平衡」という概念を提示し、研究を進めている。著書に『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）、『世界は分けてもわからない』（講談社現代新書）、『動的平衡』（木楽舎）、対談集『エッジエフェクト』（朝日新聞出版）など。翻訳書も多数。

（「教育出版」<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/download.rbz?cmd=50&cd=2028&tg=25>（2012 年 10 月 29 日アクセス）による。）

・ジャン・アンリ・ファーブル

法布尔、1823 年生。法国著名昆虫学家。自然科学博士。号称「昆虫界的荷马」。著作有『昆虫记』。『昆虫记』被翻译成世界各国语言而广受关注，并因文章的魅力而受到好评。其作品『绿色蝸蝓』被收录在全国中学语文教材之中。

《日本語訳》

1823 年生まれ。フランス有名な昆虫学者。自然科学博士。昆虫界のヴァージル、昆虫界のホメロスと呼ばれる。著作『昆虫記』。『昆虫記』は世界中で翻訳されて注目を浴び、文章の魅力もあいまって業績が評価されている。作品『緑色蝸蝓』は全国中学語文の教材として、収録されている。

（「百度百科」<http://baike.baidu.com/view/20474.htm>（2012 年 10 月 29 日アクセス）による。）

生きた時代・社会も異なれば業績も違う福岡伸一とファーブルではあるが、生物にかかわる専門的な仕事に取り組んだ、あるいは現在従事しているこの二人には、生命に対する尊敬の感情において相通じるものがあるのではないか。

さて、こうした共通点のある「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「緑色蝸蝓」であるが、文章の書き方には違いがある。「アオスジアゲハとトカゲの卵」は、自分自身の経験と体験を具体的に語りながら、生物学のあり方を批判的に検討し、動的平衡という概念を強調し

ている。文章の構成も、小学校までの説明文の基本的な構成（はじめ・なか・おわり）を踏襲したものとなっている。一方、「绿色蝸蝓」は、エッセイのような文章で、ギリギリスの外在的な特徴と生活習慣が述べられている。筆者は日常生活での観察と生物学の知識を結合させて、自分なりの言葉でギリギリスの生活習慣を記述している。擬人法や比較する表現の効果もあって、いきいきとしたギリギリスのイメージが伝わってくる文章である。

「绿色蝸蝓」がエッセイのような表現によって昆虫を説明する文章だとすれば、「アオスジアゲハとトカゲの卵」は、小学校までの説明文の述べ方をふまえて、筆者自身の体験や主張を明示し、生物観や世界観を批評する論説文であるといえるだろう。この二つの文章は、どちらも、筆者の生き物に対する愛着の情を感じさせる、昆虫を扱った前期中等教育の説明的文章教材である。しかし、両教材を比較してみると、上に述べたような違いが明らかになるのである。

第2節 教師用指導書における教材の扱われ方の比較

ここでは、「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝸蝓」のそれぞれの教師用指導書を取り上げ、教材の主題・要旨、学習目標、授業例などを比較することによって、両国の教材の扱われ方について考察する。

第1項 教材の主題・要旨に関する記述

「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝸蝓」の主題・要旨にかかわる教師用指導書の記述を、以下に引用する。

○「アオスジアゲハとトカゲの卵」

生物学者である筆者は、マウス実験の失敗を取り上げ、生命についての考え方に問題提起する。その根源に関わるものとして、少年時代の体験「アオスジアゲハの羽化」と「トカゲの卵」の話を取り上げ、人間の手を必要としない完結した姿と、人間によって未完で終わった例として、「動的平衡」という考え方から、生命と対峙する私たちの在り方を「なすすべはない」という表現で述べる。

本教材は、筆者が生命観について述べた文章である。専門的な立場で研究をする筆者が、少年時代の身近なできごとから、生命の普遍的なありようである「動的平衡」という考え方を解説している。

中学二年生は、形而上のことにも少しずつ関心をもつようになり、生命のもつ意味や本質を捉え、自分なりの考えを形成していくことのできる年齢である。自分を、家族を、周囲を、生命のつながりやその尊さで振り返り、再認識しようとする。その時、身近な動植物の姿を具体的なきっかけとすることで、生命観の深い部分へのアプローチも可能になるものである。

（教育出版（2012）『伝え合う言葉 中学国語 2 教師用指導書・教材研究編上』，教育出

版, p. 23。)

○「绿色蝈蝈」

这是一篇观察随笔,也是一篇优美的散文。作者采用生动的文艺笔调,通过生动传神的语言描写及拟人手法的运用,把蝈蝈的外形叫声及习性写得活灵活现,字里行间洋溢着作者本人对生命的尊重和热爱。

根据本文的内容和表达的特点,本文的教材价值就在于引导学生通过法布尔的笔触去感受奇妙的昆虫世界。通过阅读来走近法布尔,既可以感受他的探究精神,又可以感受那浓浓的生命意识。

《日本語訳》

この文章は観察的な随筆であり、美しい散文でもある。筆者は文学的な書き方で、いきいきとした描写と擬人手法を使ってギリギリスの外在的な特徴と生活習慣を描写している。全篇において、生命に対する筆者の尊敬と熱愛の感情が溢れている。

全篇の内容と表現の特徴によって、「绿色蝈蝈」の教材価値は、ファーブルの描写を通じて生徒を導き、奇妙な昆虫世界を感じさせるところにある。読むことを通じてファーブルに近づき彼の探求精神を感じると同時に、深い生命意識も感じられる。

(課程教材研究所中学課文課程教材研究開発中心(2007)『義務教育課程標準実験教科書 語文 七年級上冊 教師教学用書』,人民教育出版社, p. 167。)

二つの教師用指導書は、教材の内容と関わらせながら、主題・要旨について論じている。「绿色蝈蝈」の教師用指導書は、筆者が、昆虫に対する愛情及び生命を尊敬する感情を伝えたいととらえている。それに対して、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の教師用指導書は、筆者が、自らの主張する「動的平衡」という概念を納得させようとしている点を強調しているようである。

教師用指導書における主題・要旨についての論述から、それぞれの教材の価値は異なると見られる。「绿色蝈蝈」の教材価値は昆虫世界を感じさせ、ファーブルの生命意識も感じさせるといったところにある。一方、「アオスジアゲハとトカゲの卵」では、筆者の主張を理解するとともに、「生命観」に思索が向かうことが期待されているのである。

第二項 学習目標についての記述

「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「绿色蝈蝈」の学習目標にかかわる教師用指導書の記述を、以下に引用する。

○「アオスジアゲハとトカゲの卵」

・「アオスジアゲハ」と「トカゲの卵」の例によって、筆者が主張しようとしていることを考える。

- ・この文章のキーワードになっている言葉に注意して、文章を捉える。
- ・生命に対する考え方について、自分の考えを発表する。

(教育出版 (2012)『伝え合う言葉 中学国語 2 教師用指導書・教材研究編上』, 教育出版, p. 20。)

○「绿色蝸蝓」

より詳細に教師用指導書における教材の扱われ方を比較するために、ここでは、中国の西泠印社出版社が発行している教師用指導書『教案・学案』を取り上げる。そこに載っている「绿色蝸蝓」の学習目標は以下のとおりである。

1. 速读课文, 能用简洁的语言概述文章内容。
2. 能体味文中的美词佳句, 并说出其作用。
3. 培养学生的阅读能力, 激发学生探索科学奥秘的兴趣。

教学重点: 培养学生阅读文章, 概述内容的能力, 体会文章的语言特色。

《日本語訳》

1. 本文を速読して、文章の内容を簡潔な文言でまとめられる。
2. 本文の言葉遣いの美しさを吟味できて、その働きも説明できる。
3. 生徒の読む力を育てて、科学の奥秘を探索する生徒の興味を喚起すること。

指導のポイント: 生徒の読む力と文章をまとめる力を育てて、文章の文言の特徴を認識させること。

(孟建平編 (2011)『教案・学案 語文七年級上』, 西泠印社出版社, p. 158。)

「速読」(绿色蝸蝓) は日本の説明的文章指導では扱われておらず、日中の違いが表れている。その一方で、「キーワードに注意して文章を捉える」(アオスジアゲハとトカゲの卵)、「文章の内容をまとめられる」(绿色蝸蝓) に注目すると、どちらの教材に対しても、書かれている内容を理解する力の育成が求められていることがわかる。速く読む、キーワードに着目する、内容をまとめるといった、速く合理的に読む力が大切にされているといえるだろう。学習指導要領に示された「読むこと」の目標及び内容や、説明的文章の指導においてこれまで留意されてきたことがらに即した目標であるともいえる。

ただし、「绿色蝸蝓」の学習目標の中に、「言葉遣いの美しさを吟味できて、その働きも説明できる」という表現方法に着目させるものが挙げられている。「指導のポイント」にも「文章の文言の特徴を認識させる」とある。「アオスジアゲハとトカゲの卵」の方には、こうした教材の表現に目を向けさせる目標がない。その一方で、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の学習目標を見ると、「筆者が主張しようとしていることを考える」「生命に対する考え方について、自分の考えを発表する」といった記述に表れているように、筆者の主張に焦点を絞り生徒が「考え」たり「発表」したりすることを重視していることがわかる。思

考力や表現力を育てようとする意図がうかがわれるが、「緑色蝸蝓」では、「指導のポイント」にあるように、「読む力と文章をまとめる力」を育てることが強調されている。

学習目標を見ると、どちらの教材でも、速く合理的に読む力を育てようとしていることがわかる。こうした共通点がある一方で、「アオスジアゲハとトカゲの卵」は思考力と表現力をさらに求め、「緑色蝸蝓」は表現方法にも着目させようとしている。ここに、両教材の目標の違いがある。

第三項 指導計画についての記述

「アオスジアゲハとトカゲの卵」と「緑色蝸蝓」の指導計画にかかわる教師用指導書の記述を、以下に引用する。

○「アオスジアゲハとトカゲの卵」（5時間扱い）

一時間目

1 文章の全体像をつかむ。（ワークシート1）

- ①全文を読み、感想や疑問をもつ。
 - ②語句の意味を確認する。
 - ③全体の構成をつかむ。
- 2 感想や疑問を出し合って、学習の方向性をもつ。
- ①その場で解決できる疑問は皆で考えて答えを出す。
 - ②全体共通の疑問を確認する。

二時間目

1 構成を意識して内容をまとめる。（ワークシート2）

- （ア）「導入」部分について考える。
- （イ）「展開」部分について考える。

三時間目

1 「結論」部分と他の段落との関係を考える。（ワークシート3）

- ①「結論」部分の内容についてまとめる。
- ②文章全体の構成を見直す。

四時間目

1 筆者の主張を読み取り、内容に関する自分の考えを構築する。（ワークシート4）

- ①「動的平衡」についての筆者の考えをまとめる。
- ②筆者の主張を読み取る。
- ③筆者の主張に対して考えたことを文章化する。

2 一時間目に設定した学級の疑問を解決する。

五時間目

1 構築した自分の考えを発信する。(ワークシート 5)

- ①グループで発表会を行う。
- ②発表の内容について、意見交流を行う。
- ③意見交流をとおして考えたことをまとめる。

問題例 (括弧内の A～D については、後に問題を分類する考察において説明する。)

- ① P16「時間の流れとともに、絶え間ない消長、交換、変化を繰り返しつつ、それでいて一定の平衡が保たれているもの」について、次の 1. 2 の問いに答えなさい。
1 これまでの生物学者による生命の捉え方が書かれている部分を、本文中から二十八字で抜き出しなさい。(B)
2 この部分を短く言い換えている言葉を、本文中から十字以内で抜き出しなさい。(B)
- ② P17「動的な仕組み」の動的とは、具体的にどのような動きのことか。本文中から三つ抜き出しなさい。(B)
- ③ P17「やがて閉じる。」とは、ここではどうなることを意味しているか。簡潔に答えなさい。(C)
- ④ この文章で説明に用いられている例としてあげられた動物を三種、本文中から抜き出しなさい。(B)
- ⑤ この文章で、筆者は、私たちは生命とどのように向き合うべきだと述べているか。それがわかる一文を本文中からさがし、はじめの五字を抜き出しなさい。(B)
(教育出版 (2012)『伝え合う言葉 中学国語 2 教師用指導書・指導事例集』, 教育出版, p. 56～57。)

○「绿色蝈蝈」(2 時間扱い)

【课前热身】

1. 阅读全文, 给不认识的字注音并认读, 结合课文注释和工具书理解生词意思。
2. 阅读全文, 理解课文内容, 把握文章结构, 画出课文结构示意图。
3. 文题为“绿色蝈蝈”, 文章写了蝈蝈哪些方面的情况。

【课堂教与学互动设计】

一、新课导入

大自然是生动活泼、丰富多彩的. 你听过知了唱歌、蟋蟀鸣叫吧? 你看过蜘蛛勤织网、蚂蚁满载而归吧? 这些大自然大家庭的成员, 是人类亲密的朋友。听, 蝈蝈又开始唱歌了。

二、走进作者

三、走进文本(问题实例)

1. 快速阅读课文, 回答问题。

①绿色蝈蝈外表有哪些特征?

②绿色蝈蝈有哪些方面的习性? 作者主要写了哪些方面的习性?

③文章开头是怎样引出蝈蝈的?

2. 细读课文, 问题探究。

①第一句话交代了什么内容?

②当别人都庆祝节日时, “我” 在干什么? 这表明了什么?

③第3段中的“喧嚣”指什么? “倾听”什么? 这句话在结构上有什么作用?

④“绿色的蝈蝈啊, 如果你拉的琴再响亮一点儿, 那你就是比蝉更胜一筹的歌手了。”运用了什么修辞? 表达了作者怎样的思想感情?

⑤作者是如何来写蝈蝈捕食的? 突出了蝈蝈的什么特征?

⑥作者为什么说“绿色蝈蝈酷爱甜食”呢? 蝈蝈无法讲话, 无法用语言表达这一喜爱, 作者是怎样下的这个结论呢?

⑦“对于金龟子一类的昆虫, 它毫不犹豫地都接受, 吃得只剩下翅膀、头和爪”运用了什么修辞? 意在说明什么? 是什么说明方法?

⑧作者在文中不断变换对绿色蝈蝈的称呼, 这样写有何效果?

⑨最后一段文字写了什么内容? 抒发了作者怎样的思想感情?

⑩作者在文中写蝈蝈残忍贪婪的特点与作者对蝈蝈的喜爱之情是否相吻合?

四、本文主旨概括。

【课堂总结】

《日本語訳》

【授業前の予習】

1. 全篇を読み、知らない漢字にピンインを付け、注釈と辞典を使って言葉の意味を理解する。
2. 全篇を読み本文の内容を理解する。本文の構成を把握して図で示す。
3. キリギリスについて何を書かれているかという質問を考える。

【授業の展開】

一、授業の導入

大自然はいきいきとして鮮やかである。セミとコオロギの歌を聞いたことがあるでしょう？蜘蛛とアリが労働するシーンを見たことあるでしょう？大自然のメンバーである彼らは、人間の親しい友だちである。ほら、キリギリスはまた歌を歌い始めた。

二、筆者に近づく

三、本文に近づく

(問題例)

1、本文を速読して、問題に答える。

- ①緑のキリギリスにはどんな外在的な特徴があるか？ (B)
- ②緑のキリギリスにはどんな習性があるか？ (B) 筆者はどんな習性を取り上げたか？ (B)
- ③文章のはじめの部分で、どういうふうにキリギリスの話を提示したか？ (B)

2、本文を詳細に読み、問題を探究する。

- ①一つ目のセンテンスは何を教えてくれたか？ (B)
- ②ほかの人が祝日を祝う時、筆者は何をやっているか？ (B) それはどうして？ (C)
- ③第三段落の「賑やかさ」は何を指すか？ (B) 何を「よく聞く」のか？ (B) このセンテンスは文章の構成にはどういう役割があるか？ (D)
- ④「緑のキリギリス、もしあなたの声がもっと大きくなれば、あなたはセミより優秀な歌手だ。」は、どんな書き方を使っているか (D) ? 筆者のどんな感情を表しているか？ (A)
- ⑤筆者はどういうふうにキリギリスの食習慣を描写しているか？ (B) キリギリスのどんな特徴が書かれているか？ (B)
- ⑥筆者はどうして「緑のキリギリスが甘いものが好き」と言うのか？ (C) キリギリス自身は話せないの、言葉でこの好みを表せないが、筆者はどういうふうにこの結論を下したか？ (B)
- ⑦「テントウムシのような昆虫は、キリギリスは全部を受け入れ、食べ終わったら残ったのは骨だけだ。」はどんな書き方を使っているか？ (D) 筆者は何を伝えたいのか？ (A)
- ⑧筆者は、キリギリスへの呼称を何回も変えている。この書き方にはどういう効果があるか？ (D)
- ⑨最後の段落は何を書いているか？ (B) 筆者はどんな気持ちを伝えたいのか？ (A)
- ⑩キリギリスは残酷の一面があるが、それはキリギリスを好む筆者の感情と矛盾するか？ (C)

四、本文の主旨をまとめる。

【授業のまとめ】

(孟建平編 (2011)『教案・学案 語文七年級上』, 西泠印社出版社, p. 159～160。)

以下、それぞれの指導書の記述をもとにした考察を記す。

前期中等教育の国語科教材を概観すると、日本より中国の方が教材の数が多いことがわかる。そのために、中国の語文の授業では、各教材にかける指導時間が短くなる。教師用指導書に書かれているように、「绿色蝸蝓」は二時間で扱われるのに対して、「アオスジアゲハとトカゲの卵」は五時間で扱われる。その一方で、中国の授業では予習と復習が重視されている。「绿色蝸蝓」の指導計画では、授業前のウォーミングアップと授業後の復習に時間をかけるが、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画では、予習と復習に対する指導はほとんど記されていない。

さて、それぞれの教材の指導計画と指導事項とを対照させると、次のような図でまとめられる。

○「アオスジアゲハとトカゲの卵」

一時間目 …… 課題の発見

二時間目 **三時間目** …… 文章の読解

四時間目 …… 自分の考えの構築

五時間目 …… 意見の交流

○「绿色蝸蝓」

【授業前の予習】 …… 本文の読解

【授業の流れ】 …… 本文の読解

【授業後の復習】 …… 記述なし

上の図を見るとわかるように、最初の「課題の発見」から最後の「意見の交流」まで、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画における全体の流れはすっきりと整っている。それに対して、「绿色蝸蝓」の指導計画では、「本文の読解」を中心として指導が行われている。ここから、「绿色蝸蝓」より「アオスジアゲハとトカゲの卵」の方が学習に広がりがあるとわかる。繰り返し述べることになるが、「アオスジアゲハとトカゲの卵」は5時間扱いであり、「绿色蝸蝓」は2時間扱いである。それぞれの教材を扱う時間数に大きな差があ

ることによって、指導事項が上に示しているように大きく違うのだと考えられる。

次に、それぞれの指導計画に示されている「問題例」に注目してみる。「問題例」で扱われる語句は、以下の四種類に分類することが有効だと思われる。

A…要旨にかかわる質問

B…論理の展開にかかわる質問

C…書き手の判断にかかわる質問

D…表現にかかわる質問

この分類は（清水均（1991）「語句に着目した読み方指導—言葉を洞察する力」，甲斐睦朗編，『語句に着目した読み方指導 8 説明文教材 中学校』，明治図書，p. 7～10）に提示されている分類に基づいている。

そして、先に引用した、二つの指導計画中の「問題例」の各問いの後の括弧内に、種類を表すアルファベットを記したので、参照されたい。

分類した結果によると、「緑色蝸蝓」の問題例では、扱われている語句の中に論理の展開にかかわる質問（B）と表現に生かす質問（D）が多いことがわかる。それに対して、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の問題例では、論理の展開にかかわる質問（B）も多いが、表現に生かす質問（D）が少ないのである。ここから、上に述べているように「アオスジアゲハとトカゲの卵」の方が学習に広がりはあるが、学ぶ内容としては、「緑色蝸蝓」の方がより充実しているのではないかと考える。

「第二項 学習目標についての記述」で述べたように、「緑色蝸蝓」では、表現方法に留意した目標が挙げられている。「緑色蝸蝓」の指導計画では、言葉の意味と使い方及び本文での役割についての指導が多く見える。一方、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画では筆者の意図や主張についての指導が重視されており、これは設けられている学習目標に合うようになっている。どちらの教材も、学習目標についての記述に合致する計画が示されているといえるだろう。

指導の手段として、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画では5枚のワークシートが使われている。「緑色蝸蝓」の方ではワークシートは使用されない。これは注目に値する現象だと思われる。日本の国語科の授業では、小学校でも中学校でもワークシートが多く使われている傾向にあるようだ。その一方で、中国の語文科の授業では、ワークシートではなく、各教室で設置されているコンピュータを使って PowerPoint で授業を行う場合が多いと聞く。ワークシートを尊重する日本の国語科教育の特徴が、「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画に表れているのではないか。

また、日本の国語科の授業では、グループ学習等によって、生徒たちが相互に学びあうことが大切にされているようだ。授業を参観してもグループ活動がよく行われている。「アオスジアゲハとトカゲの卵」の指導計画のうち、五時間目のポイントはグループ討論にある。グループで発表して、他者と意見を交流することによって協同で学ぶ能力が育つ。それに対して、中国の語文科の授業では、生徒が一斉に黒板の方を向いて座るのが一般的で

あり、グループ学習で学びあうこともほとんど見えない。グループ学習、そして生徒達の学びあいを大切にしようとする日本の国語科教育の特徴も、この指導計画には表れているといえるだろう。

結章 研究の成果と今後の課題

第1節 研究の成果

本論文では、日中の母語教育における説明的文章指導の共通点と相違点を明らかにすることを研究の目的として設定し、特に前期中等教育に焦点を絞って、「前期中等教育における説明的文章指導の目的」（第1章）、「前期中等教育の国語科教科書における説明的文章教材の内容と構成」（第2章）、「前期中等教育における日中の説明的文章教材」（第3章）の章立てに従い考察を行なった。

第1章では、日本と中国の前期中等教育における説明的文章指導の目的について考察した。考察によって、各国では述べられている内容を正確に把握するという読解力の育成が重要な位置にあることがわかった。その結果、説明的文章指導において、両国とも教材の述べ方に着目した指導内容が織り込まれており、教材の内容に対する理解も学年が上がるに従って高まっているという共通点を見出した。その一方で、日本の説明的文章指導においては「文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力」を育むことが求められている。それに対して、中国の説明的文章指導においては、そのような能力の育成は目指されておらず、道徳的な価値を付与することが強く意識されている。ここから、日中の説明的文章指導の相違点を見出した。

第2章では、日中両国における説明的文章教材の内容と構成を分析し、比較をした。分析によって、両国の教材は、ともに、情報を得ることからフィードバックまでという認知力発達のプロセスに合っているように構成されているという共通点を見出した。一方、中国の教科書に載っている説明的文章教材の内容を分析することによって、日本の教科書にはない愛国心を高めるといったねらいをもつ教材が多いことを明確にした。ここに、説明的文章教材の内容における両国の相違点があると考えられる。

第3章では、前期中等教育における、類似した内容の教材を比較することによって、日中両国の説明的文章教材におけるそれぞれの特徴を明らかにした。取り上げたのは、日本の教育出版発行の国語科教科書に載っている「アオスジアゲハとトカゲの卵」と中国の人民教育出版社の教科書に載っている「绿色蝸蝓（緑のキリギリス）」である。

まず、二つの教材についての教材研究を行うことによって、文章の書き方や構成、表現のしかたなどにおける違いを明らかにした。そして、それぞれの教師用指導書を取り上げ、教材の主題・要旨、学習目標、授業例などを比較することによって、両国の教材の扱われ方について考察した。その結果、「绿色蝸蝓」より「アオスジアゲハとトカゲの卵」の方が学習に広がりがあるが、学ぶ内容としては、「绿色蝸蝓」の方がより充実していることがわかった。最後に、指導の手段と形式について比較をした。指導の手段に関しては、日本ではワークシートが尊重されている。指導の形式に関しては、日本ではグループ学習等による学びあい大切にされている。こうした日本の国語科教育の特徴をうかがうことができた。

第2節 今後の課題

文学教材と比べると、生徒は説明的文章教材がつまらないと感じる現状がまだあるように思われる。そして、説明的文章の授業では、生徒の興味や関心を呼び起こすのが難しく、授業の効果も望ましいものとならないと指導者は思っているようである。どのように生徒に興味・関心を持たせながら教材を読ませればよいのか、それが、両国の説明的文章指導におけるこれからの大きな課題であろう。この課題を解決するためには、まずは指導者が、従来の指導方法を乗り越えるべきである。指導過程を多様にして、教材の言葉や表現のしかただけでなく、新しい考えや実用的な知識なども含めて、生徒に学ばせるのが効果的ではないかと考える。

前に指摘したとおり、日本における説明的文章指導については、豊富な成果があげられている。それに対して、中国における説明的文章指導に関する研究はほとんど進んでいない。しかも、現在の中国の教材や指導にはいろいろな課題がある。以下、そのいくつかを挙げる。

第1章で中国の説明的文章指導について述べた。そこで、説明文のジャンルでは生徒の表現力を高めることに結びつく指導事項が設定されているが、論説文や随筆のジャンルではそうした指導事項がないことを指摘した。思考力や認識力を育てるというよりも、道徳的な価値を付与することの方が強く意識されているのである。このような指導事項が限定的であるという点に、中国の中学語文科の解決すべき大きな課題があると考えられる。

また、中国の教科書では、科学技術を題材として扱う教材が多く見られる。これら各分野における中国の科学的な成果を紹介する教材には、生徒の愛国心を高めるといったねらいがあると考えられる。このようなねらいは、指導の方向性を明確にするが、その方向性が強すぎると、説明的文章指導の意義が失われることになる。説明的文章指導の中心を、生徒の読解力や表現力、論理的な思考力などを育むことに移すべきではないかと考える。ここにも、今後の中国における説明的文章指導の大きな課題がある。

こうした課題の解決を目指して、説明的文章指導のあり方はさらに追究されなければならない。本論文で論じた内容に基づきながら、これからの中国における説明的文章教材とその指導について、今後も検討を重ねたい。

謝辞

本研究を進めるあたり、ご指導を頂いた修士論文指導教員の橋本博孝教授と守田庸一准教授に感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた国語教育研究室の皆様にも感謝します。

引用文献・参考文献

《論文等》

1. 阿部昇（1996）『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判』，明治図書。
2. 井上裕一（1998）『説明的文章で何を教えるか』，明治図書。
3. 植山俊宏（1990）「説明的文章の指導」，大槻和夫編『教職科学講座 17 国語教育学』，福村出版，p. 104。
4. 大西忠治（1991）『大西忠治教育技術著作集 13 説明的文章「読み」の指導』，明治図書。
5. 教育出版（2012）『伝え合う言葉 中学国語 2 教師用指導書・教材研究編上』，教育出版，p. 23。
6. 教育出版（2012）『伝え合う言葉 中学国語 2 教師用指導書・指導事例集』，教育出版，p. 56～57。
7. 櫻本明美（2001）「説明文」，日本国語教育学会編『国語教育辞典』，朝倉書店，p. 249。
8. 清水均（1991）「語句に着目した読み方指導一言葉を洞察する力」，甲斐睦朗編，『語句に着目した読み方指導 8 説明文教材 中学校』，明治図書，p. 7～10。
9. 全国大学国語教育学会編（2002）『国語科教育学研究の成果と展望』，明治図書。
10. 全国大学国語教育学会編（1993）『新国語学研究』，学芸図書。
11. 野地潤家編（1991）『教科教育の基礎用語シリーズ 国語科重要用語 300 の基礎知識』，明治図書。
12. 守田庸一（2011）「説明的文章の学習指導の方法」，全国大学国語教育学会編『中学校・高等学校国語科教育研究』，学芸図書，p. 99。
13. 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 国語編』，東洋館出版社。
14. 中国社会科学院語言研究所編（2005）『現代漢語詞典』，商務印書館，p. 1286。
15. 課程教材研究所中学課文課程教材研究開発中心（2007）『義務教育課程標準実験教科書 語文七年級上冊 教師教学用書』，人民教育出版社，p. 167。
16. 孟建平編（2011）『教案・学案 語文七年級上』，西泠印社出版社。

《教科書》

17. 教育出版発行 中学校国語教科書（2011 年文部科学省検定済）。教科書の名称は論文中に記載した。
18. 人民教育出版社発行 中学語文教科書（七年上冊：2007 年初審通過、七年下冊：2008 年初審通過、八年上冊：2007 年初審通過、八年下冊：2008 年初審通過、九年上冊：2003 年初審通過、九年下冊：2006 年初審通過）。各教科書の名称は論文中に記載した。

《ホームページ掲載の情報》

19. 教育出版ホームページ 中学校国語 目次/作者・筆者プロフィール 2年

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/download.rbz?cmd=50&cd=2028&tg=25> (2012年10月
29日アクセス)

20. 百度百科

<http://baike.baidu.com/view/20474.htm> (2012年10月29日アクセス)

資 料

- ・ 教材「アオスジアゲハとトカゲの卵」
- ・ 教材「緑色蛭蛭」